

098136-000-1

特63-620

落語集

桂 文左衛門/口演

M41

DBT-0373



特63



左
南
門
新
語
集



斗 泰 之 界 語 落



門 衛 左 文 桂

斗 泰 之 界 語 落



門 衛 左 文 桂

序

簑々山へ、簑々川へ、若くても互にいとむ樂は、流るゝ年の
 せを出して、拾うた桃の味の趣向、昔、噺の種とり、こゝろつ
 くしのその博多、成象堂のあるじの需めに、乗地になつた駒の手
 綱、ひく人は多く有明山、時鳥、一聲かけたが速記文、軽い口
 さき滑らかに、こを見ん人は、柴荷より肩のこりを休め、布よりも
 命の洗濯、あら面白しと笑ひ玉へ。

明治戊申の春

演者述



目次

○禁酒關所……………一

○月宮殿……………三

○上戸と下戸……………五

○甘い醫者……………七

○借家怪……………八

○自在丸……………一三

○欠伸指南……………一七

目次

形顔

馳走ぶりなり

客應

桂久花南門



○筍たけのこ……………一五

○ぬの字鼠……………一六

○近江八景……………一六

○正月丁稚……………一八

○猿ヶ嶋……………一九

○音おとの落語……………二四

目次終

桂文左衛門落語集

桂文左衛門 口演
吉田松茵 速記
山川堂桃子 編次

◎禁酒關所

落語も今様に直せませす落語と、どうしても舊の儘で申し上げねばならぬ落語とございまして、可及的は時勢に従ふて直したいと思ひますが、昔有つて當今無くなつてゐる事などは、已を得ず昔の儘で演らねばなりません、又直すに直せぬ事はなうても、無理に直します

禁酒關所



と、夫が爲に肝心の味と云ふものがなくなつてしまふ様な事がござ
 いますので、さういふお話は、矢張り從來の儘で申し上げる事に致
 して居りますから、其お積りでお聴き、否、御覽を願ひます、爰に
 或お大名がございまして、お名前はお差合ひのない様、算盤主計頭
 珠成公と致しておきます、お殿様は質素をお守り遊ばして、至つて
 儉約家でございます、所が御家中に大の御酒家がございまして、其
 御酒が大變悪い方で、御酒の上で町人を一人、お手にお掛けなすつ
 た爲め、御自分切腹に成りました、殿様は前申した通り、至極儉

約家でございますから、國中で年々酒に潰す米は澤山なものである
 故、これを差止めたいと豫て思ふて居られましたか、さうすれば其
 商賣のものは忽ち困るであらうし、且は酒を好む者が、急に飲めぬ
 様になつたならば、日々稼ぎの疲勞を慰める事も出来ないからと云
 ふので、ツイ延々になつて居りましたが、今度御家中に酒の爲に人
 を殺めたものがありましたので、町人百姓は構はんが、武士たるも
 のは三ヶ年間禁酒、若し背く者は切腹の上家は關所と云ふ事になり
 ました、甘いもの好きの方は頼着ございせんが、御酒家の方は

大層お困りでございます、只今城下の木葉屋三郎兵衛と云ふ酒屋の前をお通りになりますのは、左利進之丞様と申すお侍で……左免せよ三オ、これはく左利の旦那様でございますか、其後は誠に御無沙汰を致しまして、一度お伺ひに上りたいと心得て居りますが何分にも手前の方は、渡世柄の事でございますので、私がお屋敷へ上りました爲に、若しお疑ひを受けまして、私の方より旦那様の方へ御迷惑をかけましてはならぬと心得まして、存じながら御無沙汰致して居りました、定めし、これまで永年最負にしてやつたのに、

モウ酒を買はぬからと云ふて少しも訪れぬ、薄情な奴ぢやと御立腹でもございませうが、どうか悪からず思召し下さいまして 左イヤくそれは分つて居る、お前が云ふ通り其方が屋敷へ来てくれて疑ひを受けてはならぬから、來ない方がよい……、だがノウ三郎兵衛何より好む所の酒を飲む事が出來んのぢやから、實に困つて居る、三へい、御尤さまでございます、併し私の方とでも、お屋敷方へ澤山お出入をさして戴いて居りましたのが、それだけお花主が少うなりまして、誠に困つて居ります 左お前の方は町人は構はんと云

ふのだから、困る中にも辛抱が出来るが、此方などは、どうも酒を飲まずには居られぬと云ふ性分だ、それが一滴も飲めぬと云ふのだから、實に親に離れた様な心持が致す、只今も門前を通りかゝつた所が、酒の香が鼻に這入つて、どうにも斯うにも足が向ふへ出ぬ様になる、それ故チヨイと立寄つたのだが、若し表から拙者の姿が見ゆるといかんから其處を閉めておいてくれ 三三旦那樣、マアどうぞ此方へお上り下さいませ 左それでは一度上げてもらおう 三三サアどうぞオツとお通りを…… 左そこで、お前に頼みたい事があるの

ちや 三三へい、如何様な事でございます 左どうかネ、餘計とは云はぬ、一升だけでよいから、内々で屋敷へ持参してもらひたい …… 三三旦那樣、それは折角でございますすけれどもいけません 左サアそこちやテ、餘計であれば兎も角、ホンの一升だけぢやから、何とかして持参してくれ 三三それはどうしてもいけません、申すまでもなく、御存じの通りお屋敷町のかゝりに、禁酒番所が立つてございまして、何品によらずお調べになります、萬一酒と云ふ事が知れました時は、私の方は家がつぶれてしまひますし、第一旦那樣も

其儘では済みませぬぢやございませんか 左いかにも知れよばさう
ぢやが、それを知れぬ様にして持て来てもらひたい、拙者も自分の
身が大切ぢやから、酔ばらつて他人に氣付かれる様な事は決して仕
やせん、ナアどうか一つ頼む…… 三それはさうでもございませう
が、エ、……誠にそこが辛うございます、何品でも悉くお調べにな
りますので 左それを何とか工夫をしてもらいたいのぢや、お前が
来れば、番所の者も顔を知つて居るから、念を入れて検めるであら
うが、巧く工夫をして、顔を知らぬ者を遣してくれたら、いけぬ事

はあるまいと思ふ、武士たるものが町人のお前に、両手をついて頼
むのぢやから、どうか工夫をしてくれ、首尾よく持て来てくれた者
には格別の褒美を取らすから 三それ程に仰有るのでございますか
ら、お受合ひ申す譯には参りませんが、店の者とも相談を致しまし
て何とか工夫がつかまりましたら、持参致させませう 左どうか頼む、
楽しんで待つて居るから 三マアおよろしいぢやございませんか、只
今お茶を一つ差上げます 左イヤ、長座をして居つて、萬一誰かの
耳へ這入つてはいかんから、モウ歸る 三左様でございますか、そ

れは一向お愛想もございませいで……、左様なら御免下さいませ。

左様の者、拙者が参つた事は、決して口外をせぬ様にしてくれ、

○「承知致して居ります、滅多に他言は致しません……、左様なら

……、旦那、何か御用でございましたのですか 三「ぬらい事を頼

まれたのぢや ○「へ、エ……、どんな事でございます 三「何とか工

夫をして、一升だけ屋敷へ持て来てくれと仰有る…… ○「それはい

けません、旦那、彼の通り番所が立つてありまして、何品でも一々

お調べになります、そんな事をして、若し知れた時はお家は開所、

又彼の旦那も腹を切らされて家はつぶれて了ひます、貴方は何故お

断りなさいませぬ 三「それはお前が云ふまでもない、種々お断り申

したのぢやが、決して他人に氣付かれる様な事はせぬから、是非工

夫をしてくれ、首尾よく持参してくれた者には、格別の褒美をとら

すからと、強てお頼みなさるのぢや ○「此儘捨て置いたらどうで

す 三「イヤ、さういふ譯にはいかん、お侍たる者が町人の私等に両

手を突いて頼むとまで仰有つたのぢやから、此儘捨て置くといふ譯

にもいかん、何か好い工夫はあるまいか…… ○「ありませんなア

折角工夫をして持つて行くワ、直にフン縛られて牢へ投り込まれるワ……、そんな事が出来ずもんか。△コレ久七とん、何と云ふ事を云ふのぢやない、旦那は何も徳で僅か一升の酒を賣りたいと仰有るのぢやないせ、お前もそれ位の事が分らん事はあるまい、永年御最負になつた其旦那が、それ程にお頼みなさるのを、一遍は断つたけれども、人情としてそれはどうしてもいけませんと、無下に言切る事はできませんと仰有る、御尤なお話ぢやないか……、旦那、よろしうございます、私が一番工夫してみませう。三甚助、何とか工夫が

できるなら、してあげてくれ。甚へい、何でもない事です。三どうする積りぢや、甚お宅に銅のスッポンがありましたなア、あれに入れて、それを菓子折に入れて、チャーンと杉原で包んで水引をかけて。三成程、甚さうして、私は御城下の鶴屋と申す菓子屋でございませう、左利進之丞様へ菓子を持って参りますから、どうぞお通しを願ひます、と斯う申します、そこでお調べになつても、中はダブつかん様にして、杉原で包んで、水引がかけてございますから、通れいと云ふに違ひございません。三フン、成程、甚さうして持て参

りますと、格別の褒美をやるに仰有るのなら、何程下さるか分りませんが、萬更二朱や一分ではございませぬ。三「それはさうぢやらう。甚だうせ少しは浮雲い所へ出ねば、熟柿は取れませぬからなア。三併し、さう巧く行くぢやらうか。甚だ行きますとも、大丈夫でございませぬ、行かなんた所か、外の名を云ふてあるのですから、あやしむと思ふたら、直に逃げて歸ればそれ切りです、そこまで骨を折つて行けなれたら、先方様へ申譯ができるぢやございませぬか。三「いかにもさうぢや、コレ、その朝のスツポツと菓子折の空いたのと

を持っておいで、ア、これでよろしい、そして音のせぬ様に一はい入れて、シツカリ詰をして……、それから、他所で此事を誰も他言るのぢやないぞ一回へイ畏りました。三「サア、出来たら御苦勞ぢやが往つて下され。甚だ往つて参ります……、オイ、巧くいつたら澤山褒美を貰ふて、皆に羨ましがらせてやるワ」と屋敷町へ参りますと、番所にはお殿様が算盤主計頭様でございませぬから、算盤打違ひの紋のついた慢幕を張りまして、前には突棒、刺股、袖搦を立てまして、嚴重な構へでございませぬ、それにはお二頭が麻の上下でお詰になつ

て居ります 甲「毎日御苦勞でござる 乙「御同様に御苦勞でござる、併し家中に酒好の者は多勢ござるが、御法度を破れば切腹の上に家は闕所と云ふので、未だ怪しいものを持参つたものは一人もござらん 甲「左様 乙「なれども、下戸の者はよろしいが、お互に我々も好む方でござるから、餘程辛うござるな 甲「左様々々……、ア、コリヤ〜其方は何者だツ、何れから何れへ何品を持て参る、此處に番所のあるのを其方は分らんのか 其へイ〜、誠に恐れ入ります 甲「恐れ入るでは分らん 其ツイ、うっかり致して居りましたの

で 甲「うっかりして居つた……、其方は盲目か、馬鹿ツ、何れの者で何れへ何品を持て参るのだ 其へイ、私は御城下の鶴屋と申す菓子屋の若い者でございます 甲「フ、ーン、鶴屋か 其へ左利進之丞様のお屋敷へ御註文の菓子を持て参ります、どうぞお通しを願ひます 甲「イヤ、何品にもせよ一應検めた上でなければ通す事はならん、其品をこれへ出せツ 其へどうぞ御覧下さいませ 甲「いかにも是は菓子らしいが、其方からの進物か 其へイエ、左利様から他家へお遣しになるので、チャンと包んで持つて来いと云ふ御註文でございます

甲「御同役、これは菓子に相違ない様でござるなア、乙「アお待ちなされ、菓子折に入つて居ても肝心中の物を検めずして通しては、役目を粗略にするど云ふものでござる。甲「成程、然らば中を検めませう。甚ア、モシ旦那様、決して怪しいものぢやござりませぬ、全く菓子に相違ござりませぬので……。甲「黙れッ、菓子に相違なくば検めたとして苦しうないぢやないか、此方は役目を以て中を調べるのだ……、イヨー、御同役これを御覧なされ、中に斯様なものが入つてござる。乙「これは怪しからん、ユリヤッ菓子折の中に斯様な器が

入つて居る、これでも菓子に相違ないか。甚エ、……、菓子に相違ないと心得ます。乙「暖味いたした事を申すな、自分が持参つたものを相違ないと心得ますとは何の事だ、只今篤と検めてやるから、それに控へて居れッ……、御同役、その湯香をお貸し下され、ユリヤ斯様な水菓子は新發明を致したのか、ウ、ン……、偽り者奴が、併し未だ口中へ入れて味はうてみぬ間は確とした事は分り兼ね、今日口中へ入れて検めて遣すから控へて居れ。甲「イヤお待ちなされ。乙「何故でござる。甲「それは酒に相違ない事は香でも知れて居るではござ

らんか、それを知りつゝ口中へ入れては等しく罪人をごさるを乙「イヤく、決して御心配には及びません、役目を以て調べるの口
中へも入れずして、是を何とも決定する事はできぬではござらんか
決して構ひません、若しお咎めがあつた時は、拙者が申開きを致す
甲「成程、御道理でござる 乙「控へて居れ、グウツ、グウツ、グウ
ツ……、久々で實に何とも申せません、餘程上等でござる、グウツ
グウツ、グウツ、コリヤツ斯様なものを持参つて菓子だなど、偽り
者奴が、ダガ身共一人ではいかん、其爲の相役だから御同役がモウ

一度念の爲にお検めになつた上で決定致す、サアお検め下され 甲「
左様か……、コリヤツ、只今御同役がお検になつたけれども、一人
で決定する譯には参らん、役儀の表、モウ一度検るから控へて居れ
……、グウツ、グウツ、グウツ、これはどうも結構でござる 乙「コ
リヤツ、是は酒に相違ないぞ、斯様なものを持参つて、番所役人を
欺罔らんなど、誰かある此奴をフン縛れツ 甚「フツツ…… 三「
どうした甚助 甚「スツツリく 三「それはぬらい、スツツリいつた
か 甚「へい、いさかけましたか 三「ナニ 甚「一人の役人がこれだけ菓

子に相違あるまいから通してもよからうと云ひますと、片一方の役
 人が、イヤ菓子折だからと云ふて其儘通しては、役目を粗略にする
 と云ふものであるから、中の品物を検めねばならんと申しますので
 私はヒヤツとして、其時に逃げて歸らうかと思ひましたが、マア成
 るだけ押強ういつてみやうと思ひして、三ツン、フン、其ツツと控
 へて居りました、すると菓子折の中に斯様な物が入つてある、これ
 でも菓子に相違ないかと申しますから、ハイ、相違ないと心得ます
 と申しますと、自分が持参したものを相違ないと心得ますとはどう

だ、一度口中へ入れて調べてやると申します、三ツン、フン、菓子
 一方の役人が、香でも分つて居るのに、そんな物を口へ入れて若し
 お咎めがあつたらいかんと云ひますと、其御心配には及ばん、口へ
 入れずに何とも定める事は出来んから味うてみるのは、役目に念を
 入れて居るのである、若し咎められたら、拙者が申開きをすると云
 ふて、自分が飲んでから、拙者一人では定める事が出来ん、其爲の
 相役だから、御同役がモウ一度お調べになると、勝手な事ばかり云
 ふて二人してスツカリ飲んで了うてから、是は酒に相違ない、斯様

な物ものを持もち参まゐつて、役人やくにんを欺たばからんと、誰たれかある此こゝ奴やつをフン縛じばつてしまへッ、と斯かう云いふのです。今日こんにち旦那だんな、全体ぜんたい甚じん助すけどんの思おも惑わくがい
 さません。三さん「いかぬと思おもふのなら、何な故げ最さい初しゆに云いはんのぢや、最さい初しゆ
 に云いひました所ところが、此人このひとは中なか々々強かう情じやうですから、成なる程ほどさうかとは減ゆつた多た
 に申まをしません……、菓くわし子し折せりに入れて杉すぎ原はらで包つんで又また風ふう呂ろ敷しきで包つんで
 さう二重にじゆう三重さんじゆうに包つんだら、向むかふは猶なほ更さら念ねんを入れて調しらべるに極きまつて居ゐ
 ます、今こんど度は私わたしが往いつて來まます。三さん「お前はとうして往ゆく積つりぢや、
 今わたし私わたしはあんな不ぶ細さい工くな事ことはしません、ムキ出だしで外そとから見みゆる様やう

に罎びんに入れて、口くちの所ところへ髪かみ附つけ油あぶらを塗ぬつておきます。三さん「それから、今こんど
 さうして私わたしは御ご城じやう下かの丹たん波は屋やの若わかい者ものでございしますが、左さ利り様さまのお
 屋や敷しきへ櫃かばの油あぶらを持もちて参まゐりますと斯かう申まをします、役人やくにんが口くちの所ところを嗅かい
 でみると、油あぶらの香かほが致いたしますから、これなら宜よからうと通とほしてくれ
 るに違ちがひありません。三さん「これは成なる程ほどよい工く夫ふうぢや、餘あまり念ねんを入れ過す
 ると却かへつ疑うたがはれる、それより外そとから見みぬ透すいた物ものに入れて、ムキ出だ
 しで行ゆくと向むかふが油ゆ断だんをする……、これはよい者ものへぢや、どうぞさ
 うやつて下くだされ。△「畏かしこまりました……。三さん「さうく、その罎びんに入れて

髪附油が中へ這入らん様に氣をつけて……、今度は首尾ようやつて
 来て下され 今御氣遣はいりません、甚助どんはあんなに相な事
 を云ふて行つて失策つて歸りましたが私の方は大丈夫です、マア往
 つて参ります」と番所へ参りますと、こちらは久しぶりで一人前五
 合宛も飲んだのですから、大分酔が廻つて居ります 乙「御同役、今
 日は如何なる吉日であるか、久々で誠によい心持でござる 甲「左様
 貴殿が役目を以て調べるのだから、差支はないと仰有つたが、成程
 拙者は其處へ氣がつきませなんだ……、貴殿のお蔭で實はよい心持

でござる 乙「イヤどう致して、拙者の働きではござらん 甲「イヤ、
 拙者は初めに眞の菓子と心得て通さうと致したが、それが疎漏で
 ざつた、中の品を檢めねばならぬとは、宜い所へお氣がつきました
 全く貴殿のお蔭で 乙「イヤ、どう致して…… 甲「ア、又何か持つ
 て参つたな 今へい、私は御城下の丹波屋の若い者でございます、
 丹波屋か……、フム名は豫て聞いて居る、それが何方へ何品を持つ
 て参るのだ 今エ、左利様のお屋敷へ櫃の油を持って参りますので
 甲「ナニ油だ……、此方へ出せ、何品によらず一應檢めるのが我々

の役目だ、此方へオーツと出せ 今へい、これでございます、

甲「成程、油の香が致して居る、これは本當らしうござるが如何で

す、通してやりませうか 乙「イヤ、左様な粗略な事をしては役

目の落度になります、向ふが油だと申したからと云つて直にそれを

信じる事はできません、假令香は油の様でも、一應中を檢めねばい

けません 甲「左様々々 今日那、それは油に相違ございません、詰

を扱えますと幾分か香がぬけますので…… 乙「黙れ、中を充分檢

めるのが此方の役目だ、控へて居れ…… ハ、一、詰を扱くとコロ

リツと香が變りましたぞ……、コリヤツ、見れば口の所だけ油氣の

ものを塗つて中の香はまるで違つて居る、これでも油だと申すか、

今へい、油に相違ございませんので…… 乙「ヨシ、油か油で

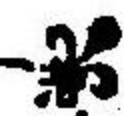
ないか只今口中へ入れて檢めて遣はず、飲んででは悪いいと云ふもの

を持参つて、油だなど、役人を盲目同様に心得て居るか、偽り者

奴が……、御同役又一升参りました、一應調べませう 甲「どうぞお

調べ下さり 乙「控へて居れ、今檢めた上で油に相違なくば通して

くれる、ウ、ーン、斯様な物を油だなど、言語道斷な奴だ……、御



兎も角、それを皆飲んで了ふとは、町人ぢやと思ふて餘り馬鹿にして居ます、私はどうしても返報をしてやり升 三、その返報と云ふのは、どうしてするのぢや □先刻お清どんが洗濯をするのに無患子の皮を煮出して居ましたから、あれを一升徳利に入れて行つて、私は小西才助と申す藥種屋でございます、左利様のお屋敷へ無患子の煎じ汁を持って参りますと、斯う申しますと、先刻から菓子ぢやの、油ぢやのと、二度も偽つて行きましたから、左利様の屋敷へ行くと申しますと、又酒ぢやと思ふて大分酔ふて居るに違ひありませんか



ら少々せうくの事は氣きがつかずかに飲のびに極きまつて居おます、一ひとつ苦くい々々のを飲のまして吃驚びっくりさしてやります 三、それは飲のびに違ちがひなからうが、相あ手ては上かみの役人やくにんぢやから、そんな事ことをしてはいかん □なんの構かまひますもんか、此方こちらは正真しやうしんの物ものを正真しやうしんで云いふて居おるのに、それを飲のびのは向むかふの勝手かたてです、此方こちらの知しつた事ことぢやありません 三、成程なるほどそれもさうぢや、實じつは私わしも餘あまり忌々いまくしいと思おもふて居おるのぢやから、それではそのつをやつてもらはう □よろしうございます、オイお清どんお前まへが先刻さうき拵こしらへた無患子むくろじの煎せんじ汁じゆを、此徳利このとくりへ一いぱい入れてんか…

…、さうくそれで結構…、エ、旦那、一寸行つて参ります 三
 ア、大きに御苦勞ぢやなア」と番所へ来てみますと、何しろ一人の
 腹へ一升宛も這入つて居りますから、上下は藏の屋根に風が引掛つ
 た様に斜になつて、目が座つて居るかほりに、御自分はキッチンと座
 つて居る積りですが體が崩れて居ります □へい、私は小西才助と
 申す藥種屋の店の者でございます、左利進之丞様のお屋敷へ無患子
 の煎じたのを持って参ります、どうぞお通を願ひます 乙「コリヤ〜
 待てツ、おのれが勝手に饒舌つて勝手に通らうとする、不届な奴だ

…、ナニ左利進之丞様の屋敷へ無患子の煎じたのを持って参る…
 先程から、二度三度手を變へ品を變へて實にどうも怪しからん奴だ
 その品をこれへ出せツ、篤ど檢めた上で、いよくそれに相違なく
 ば通してくれる □旦那、これは洗濯にお使ひになるので、全く無
 患子の煎じ汁に相違ございません 乙「相違あらうが無からうが此方
 は役目を以て調べるのだから、これへ出せ…、御同役、又一升参
 りました、ハ、一、今度は少し品が變つたらしうござる…、コリ
 ヤツ、斯様なものを無患子の煎じ汁だなど、役人を盲目同様に心得

て居るかッ、偽り者奴が……、今口中の淨玻璃の鏡にかけて検めて遣すから其處に控へて居れッ □ア、モシ旦那、それはお飲りなさるものぢやございません、そんな物を口へお入れになつたら、大變苦ふございます 乙「黙れッ……、何品に限らず検めるのが我々の役目だ、其方が彼是申す事はいらん、それに控へて居れ、どうも餘程厚顏しい奴だなア……、御同役、毎度お先へ……、ケブ……ッ、これは大層品が變つたとみねて何だかいやな香が致す……、御同役、今まで兩度ながら拙者がお先へ検めましたから、今度は貴殿からお

検め下され 甲「左様か、然らば拙者がお先へ検めませう、コリヤツ これまでは兩度ながら御同役がお先へお検めになつたが、今度は身共が先に検めてやるから控へて居れ、偽り者奴が、フ、ーン、これは變な香が致しますなア、矢張りこれまで通り貴殿からお先へお検め下され 乙「左様か……、それでは矢張り拙者から先へ検めませう コリヤツ、一度ならず二度三度、斯様な物を持参つて役人を欺罔らうとする、不埒千萬な奴だ、控へて居れッ……、今までの上等であつたから、其後へ悪るいのを飲むと、どうも香が鼻についていけ

ません、斯う云ふ工合に鼻をつまんでやります……、グウツ／＼、
 フワーツ、ゲエーツ……、コリヤツ、おのれツ、斯様なものを上役
 人に飲ますと云ふ事があるかッ □「さうですから、私が初めにそれ
 は無患子の煎じたのですから、そんなものをお飲りになつては苦う
 て仕方がございませんと申して居りますのに、旦那が御勝手に飲
 りなされたのです。乙「然らば其方は本當の無患子の煎じ汁を持参つ
 て無患子の煎じ汁だと申したのか □「左様でございます。乙「おのれ
 正直者奴が……」

◎月宮殿

徳「眠たい時にコロツと斯う横になつた心持は、何とも云へん、ア
 、よい心持ちや。〇「モシ、甚兵衛さん所から、貴郎に一遍来てくれ
 と、今お使ひがありましたから、一遍往つて来なされ。徳「さうか……
 ……、それでは邪魔くさいが往つて来う……、今日は甚オ、徳兵
 衛さんよう来て下さつた、サア此方へ上りなされ。徳「へイ、只今お
 使ひがありましたさうですが、どういふ御用で。甚「イヤ、別に大し

た事でもないが、今日或所から鰻を貰ふたのでなア、鶴「それは大に御馳走さんで、甚「まだ食べますとも何とも云ふてやせんがな……、けれども、いづれお前さんにも食べますつもりぢや、鶴「何方です、東吳ですか菱富ですか柴藤ですか、甚「イ、ヤ、生きて居るやつを貰ふたのぢや、それで、お前さんは庖刀が持てると云ふ事を聞いて居るので、其料理をしてもらおうと思ふて呼びにやつたのぢや、鶴「左様ですか……、鰻はまだやつた事がありませんが、マアやつてみませう、何處に居ます、甚「庭の盥に入れてある、大分大きなやつぢや

せ、鶴「ほんに大きなやつですなア、甚「私も先刻から一遍捕まへてやらうと思ふてやつてみたが中々掴めんものぢや、鶴「それは一寸呼吸もので馴れぬ者には中々掴めません、グツと掴むと、ソレ抜けてしまひます、よつてに最初は力を入れずに斯う云ふ工合に撫てやりませ、甚「撫てやるとどうする、鶴「斯う按摩をしてやりませと、甚「冗談を云ひなさんな、鶴「イエ人間でも鰻でも同じ事です、斯う背中を撫てやりませと溜飲が下つてよい氣持になります、さうして油断をして居る所を、グーツ、と矢張り抜けてしまひます、甚「何を云ふて居

るぢやい、そんな阿呆らしい事を云ふて居すに早う掴みなされ 徳
 よろしい、おのれツと、ソレ今度は大丈夫です……、コラッソ、中
 々骨の折れるやつぢや、ヌル〜と何處まで抜けくさる……、これ
 はいかん、モシ、モシ、お氣の毒ですが裏の切戸をお開けなすつて
 …… 甚コレ〜何處へ行くのぢや、鰻の頭を此方向けたらよいの
 ぢやがなア 徳それが傍から見居る様にさう自由に行きますもん
 か 甚鰻を持ってグル〜廻り歩いて、何處へ行くのぢやいなア……
 徳何處へ行くつて私に尋ねられても分りません、鰻に問ふてもら

はんど…… 甚難儀な人ぢやなアお前さんは、その頭を向ふひけす
 に上へ向けなされ 徳成程これはよい工夫ですなア、自分がやつて
 居ると僅かこれだけの工夫がつかえません……、ア、矢張りいかん、
 今度は上へ行きませ……、モウ斯うなつたら根氣競べぢや、鰻が
 根負けするか私が根負けするか、クソツおのれ、モシ一寸背繼を出し
 て……、此處に幸ひ梯がかゝつて居る…… 甚コレ徳兵衛さん、浮
 雲い、々々々」と云ふて居ります間に到頭屋根へ上つてしまひまし
 た、所が此鰻は中々人間の手に合ふ様な鰻ではございません、餘程

功を経まして天上を仕やうと云ふ大鯢で、池に居る間は小さな姿でそれだけの力しかないと思つて、人間に捕まらされたが、天上をずる時機が参りましたものか、屋根へ上りますと黒雲が舞下つて参りました、其黒雲の中へ鯢の頭がチヨイと這入つたかと思ふ間に、今まで一尺餘りの鯢が、忽ち三間程になりましたから、徳兵衛は吃驚して、思はず知らず其尾へ抱き付きますと、鯢は徳兵衛を抱き付かした儘で、上へ々々と昇つて参りまして、大分昇つたと思ふ時分に鯢も勞れたとみぬて、ブル〜ツと尾を振りましたから、徳兵衛は

其處へヅル〜と上り落されました、鯢は身体が軽くなつたものですから、ズン〜昇つてしまひました 鯢「ハテなア、大分昇つた様に思ふが、一体此處は何處ぢやらう……、どうも日本の様でないがモシ一寸お尋ね申します ×「ハイ 鯢「エ、此處は矢張り日本でございませうか ×「イヤ此處は日本ではない 鯢「へ、エ……、何と云ふ所です ×「此處は天國の日月街道と云ふ所ぢや 鯢「天國の日月街道……、待てよ何でも聞いた事がある様な気がするなア……、さう〜去年の夏裏の井戸端へ落ちた雷が、井戸側で腰を打つて困つて居るの

を、私が種々世話をしてやつた、其雷が日月街道の電屋五郎兵衛とか云ふ者ぢやと云ふて居た、ナアモシ、此邊に電屋五郎兵衛と云ふ雷さんはございませんですか、 \times それは此南の筋を西へ入つた所に太鼓の看板が出て居る、其所が五郎兵衛さんの宅ぢや、徳「左様ですか、どうも大きに有難う……、ハ、アーン此處ぢやなア、太鼓の看板が出て電屋五郎兵衛と云ふ表札が打つてある、エ、お頼み申します、電屋五郎兵衛さんはお宅でございませるか、五「ハイ五郎兵衛は私ですが、貴郎は……、徳「イヨ一五郎兵衛さん、御機嫌よろしう、

47
五「見れば貴郎は下界の御人ぢやが……、徳「五郎兵衛さん、貴郎は記憶が悪るいですなア、去年の夏貴郎が私所の裏へ落ちて井戸側で腰を打つて困つて居なつた時に、私が膏藥を貼つて介抱しておけましたか、お忘れになりましたか、五「如何にも貴郎は其時お世話になりました、下界の紙屋の徳兵衛さんですか、これはどうもコロツと見忘れて居ました、其節は大變御厄介になりました、サアどうぞ此方へ上つて下さい、併しどうして此天國へお越しでした、徳「鰻と一緒に参りました、五「鰻屋さんとは……、徳「イエ鰻屋ぢやありません

ん、饅です、五成程今日は饅の天上があると聞いて居ましたが、能う一緒に来られましたなア、徳へい其尾へア下つて来まして、此處で落されましたので、五それは此處で落されなさつて誠に幸ひです、モ一つ上まで連れて行かれたら到底下界の人は生きて居られせん、それは幸ひでした……、ア、コレおなり、おなり、五へい、五此方がお前にいつも話をして居る下界の紙屋の徳兵衛さんぢや、五左様でございますか、初めましてお目にかかります、昨年は良人が落ちました節にいろくお世話になりましたさうで、一遍お禮

に参らねば濟まんといつても申して居るのでございますが、ツイよい機会がございましたので、御無沙汰を致して居ります、併し能うお昇りでございました、五徳兵衛さん、恰度よい日に来なさつた、今日は一年に一度、月宮殿の拜見を許される日です、徳へい……、それはよい日に来しましたなア、五貴郎は定めて草臥れておいでとせうが、今日だけで明日はモウ拜見が出来んのですから、一緒にお越しなさいませんか、私はこれから出かけ様と思ふて居た所です、徳へい連れて行つてもらひます、五それでは其姿ではいけません、お

なり其道具箱を持っておいで……、サア徳兵衛さん頭をお出しなされ
 馬「ア痛ッ、何をしなされる、人の頭を金槌で擲つて……、こんな細
 長い瘤が出来ましたがなア、五「觸つてはいけません、下界の人の姿
 では拜見が出来ませんから、貴郎を雷にして進げるのです、馬「此瘤
 は、五「それは角です、風があたりと直に堅うなります、サア今度は
 両方の手をお出しなされ、徳「アッ、どうも酷い事をやりますなア、
 両方とも指を三本にして了うて……、五「左様、雷に指が五本あつて
 はいけません、それから裸体になつて其憤鼻揮を外して、貴郎は虎

の皮の憤鼻揮は能う仕なさんぢやらう、おなり、その狸の方を持
 ておいで……、徳兵衛さんこれを締めなされ、さうして此太鼓を背
 負ふて、さうく……、これは陰陽の撥と云ふて右が陰で左が陽、
 それからこれを前に提げて、徳「これは何です、五「それをカチくッ
 とやると電が出ます、徳「成程……、日本の火打石の様なものです
 な、五「左様、それでよろしい、おなり、一寸行つてくるから、歸つ
 たら一杯進げる様に、何か珍しい物を、と云ふて餘り濃厚い物は口
 に適ふまいから何か淡泊した北時雨の吸物に、龍の髯の塩焼でも拵

へておいて外の物は歸つてから仕たらよい……、サア徳兵衛さん出
 かけませう、一遍太鼓を鳴らしてみなされ斯う云ふ工合にゴロく
 く、カチくく 徳「面白いですなア、一遍やつてみませう
 「ゴロゴロ、カチ、ゴロカチ、カチくゴロ 五「ハ、ハ、……、ど
 うも勢がありませんなア、マア少し馴れたら巧くやれる様になりま
 す 徳「ナア五郎兵衛さん、向ふの家に何か綺麗な物を拵らへて居ま
 すな 五「天國では家と云ひません、あれを陣と云ひます 徳「へ、エ
 ……陣と云ひますか、何を拵へて居るのです 五「虹を織つて居ます

徳「虹と云ふと下界から見ゆる虹ですか 五「左様々々、その虹を織
 つて居る陣です 徳「虹は織物ですか、妙ですなア…… 五「日本の京
 都でも織物を織つて居る所をにじちん(西陣)と云ひませう 徳「ハ、
 ハ、ツ……、彼處に真白な綿の様な物を拵へて居るのは 五「あれは
 雪を製造して居るのです、京、大阪邊へ降らす分は止めて此頃は主
 に北國邊へ降らす雪を拵へて居ます 徳「雪ですか、成程……、あの
 向ふに青々とした池の様なものが見えますが、あれは何です 五「あ
 れは貯水池です、春雨、夕立、時雨、皆それく池が違ひます、ア

徳兵衛さん氣を付けんと浮雲い、其處に穴が明いて居ますから……、それが衆仙人踏外しの穴と云ふて昔衆仙人が落ちた穴で、私が去年落ちたのも此穴からです、下界はクルく廻轉つて居ますから時間々々で變りますが恰度今貴郎の宅の所がこの直下に當つて居ます、覗いて見なされ 鶴はんは大變近う見えますなア、ハ、ーン、破處が私の宅ですか、ア、家妻が裏へ出て仰向いて居ます、私が天へ昇つたので心配して居るのでせう、オーイ、私は天へ来て電屋五郎兵衛さん所に無事に居るから案じなヨー 五郎そんな事を云ふても

聞ゆやしません、サア此方へかいでなされ、向ふに見ゆるのが月宮殿です、あれが日の御門に月の御門、正面が桂御門 鶴成程立派なものですなア、彼處に仰山並んで居るのは 五郎あれは星さんです、鶴星さんですか、あれが……、中に爛酔になつて居る星さんが居ますなア 五郎あれが、よい(酔)の明星 五郎戸を持って氣張つて居るのは 五郎あれはあけ(曉)の明星 鶴あの七五三繩を張つて恭しうしてあるのは何です 五郎あの中に臍が入れてあります 鶴臍と云ひますと 五郎雷が落ちると臍を取りませう 鶴へエ、そんな事を聞い

て居ます、スルと雷の取つた臍が皆入れてあるのですか 五皆じや
ありません、我々は落ちた時に手當り次第に取るのですが、外の臍
はあきません、巳歳、巳月、巳日生れの三巳揃ふた女の出臍を取り
ますと、それが偉いので、それを一つ喰ひますと、通力自在になれ
ます 徳「通力自在とは結構ですなア、貴郎も喰ひましたか 五「中々
どうして、一つ欲しいと思たら、それだけの手續をして澤山な金を
上げんと下げてくれません、自分が取つて来たものでも勝手に喰ふ
たら重い罰があります 徳「難しいもんですなア 五「ア、一寸、私は

星さんに挨拶に行つて来ますから暫く待て居て下さい、誰か来て咎
めたら電屋五郎兵衛の親類の者じやと云ふておいたらよろしい、若
し名を尋ねたら何とかよい加減な名を云ふておきなされ 徳「それで
は徳兵衛が天へ来たのですから、天竺徳兵衛と云ふておきます、マ
アなるべく早う歸つてもらはんと、萬一化の皮が剥げるといけませ
んから……、ハ、ア、星さんが皆奥へ這入て了ふた……、斯うつ
と私も折角天へ来て此儘下界へ下りるのも残念じやから、彼の櫃に
入れてある臍を一つ喰つてやらう、通力自在になつたら見付けられ

た所で、逃げるのは巧いもんじや、一つ盗んでやらう、錠があるしてあるな、此石で……、明いた々々々、成程仰山入つてあるはいこれが三巳揃ふた臍か、一つ喰つて見やう、フ、ーン餘り旨うないもんじや、モ一つ喰つてやらう……、寧ろ此櫃を背負ふて行つてやれ」と其櫃を背負ふて門を出やうとしますと、許多の星が見付けまして、星「おのれ大切なる臍を盗みし奴、尋常に繩に掛れッ、鶴「何じや、見れば頭をピカ／＼光らして夜這星奴が、貴様等に捕へられる様な徳兵衛さんじやないわい、捕へるなら捕へて見い」と元來た道

へトシトシ逃げて参りましたが、通力自在の功力も無いと見ぬて、衆仙人踏外しの穴へうつかり踏かぶりしました、鶴「ヒヤーツ朱策うたッ、廻轉り工合で變ると云ふたが、先刻見た時は裏の井戸端じやつたが、今はどうやら海の上らしいぞ、私は水泳ぎを知らんが困つた事じやはい」と思ふて居る間に海の中へ眞逆様、鶴「助けてくれー」と大きな聲を出しましたので、フツと目が覺めますと、體中汗でビツシヨリ濡れて居りました。

◎上月と下月

長いもの計りでは、却て御退屈を催す虞がございますから、間へ短いのを取らせて申上ります……、前にも申しました通り酒故に肝心の役目をば粗略に仕たり、又は喧嘩口論其他種々の不都合が出来致します、私も若い時分に大酒を致しました爲に身体を損ねまして、永らく難儀を致して居ります、酒は命を縮める刃物じやと云ふ事を聞いた事がございりますが、成程さうかも知れませんが、併し御酒家の方

から云ひますと、酒は百薬の長じやとか、憂の玉箒とか、又は下戸の建てた蔵はないとか皆それ々に我田引水の言ひ艸がございまして、尤毎度申しますが、我田へ水を引く位は何でもない事で、現今は流し元へ水の引ける時節でございまして、扱其酒にも各自の癖がございまして、酔ふに従ふて怒る酒に、機嫌酒、寝て了ふ酒、又チビく長うかゝつて飲む性と、大きな器でガブく飲む性と、梯子酒と申して酔ふて居る上に場所を變へて又飲みたい性など澤山ございまして、前方狸々講と云ふのがございまして、三升より下の者は其講へ入れ

ません、大酒家も澤山と云いますもので、私の幼少の頃塚に植木屋
 で道木と云ふ人がございまして、仕事に行くのにもいつも五升樽を提
 げて行きましたさうで、腰を据ゑたら一斗位飲んだ様に聞いて居り
 ますけれども、狸々講の中では其位飲んでも大關にはなれませなん
 だ、それは何故かと申しますと飲む事は能う飲んでも、體が崩れま
 した爲に大關にはなれなんだと云と事で、これについて面白い話が
 ございます、其道木と云ふ人が酔ふて溝へ陥りまして、其儘寢て居
 りました所へ朋友が通りかゝつて、自分の肩へ縋らして連れて歸つ

て「お前さんは好きな酒なら飲むのも宜いが溝へ陥つて其儘寢て了
 ふ様な見苦しい事があるものか、此様に飲まずとモ少し好い加減に
 飲んで置いたらどうじゃ」と意見を致しましたら「イヤこれで私の
 好い加減です」と云ふたさうでございまして。
 又下戸の方にも種々ございまして、同じ嫌ひと云ふても、交際なら一
 合位は飲むと云ふ人もあり、無理に勤めても盃に二三杯より飲けん
 と云ふ人もあります、又どれ程勤められても、一滴も飲ぬと云ふ人
 もありまして、何によらず上に上のあるものでございまして、或の方

が大の酒嫌ひで、香を嗅いでも酔ふと云ふ位で、御自分でも私程の下戸はあるまいと思ふて居られました所が、今度、下戸會と云ふのが出来ましたので、「私は大の下戸で恐らく此上の下戸は世間にあるまいと思ふて居るのじやから、一遍其會長と云ふのに會ふて様子を見てやらう」と事務所へお越しなされました。○「御免……」
 何誰 ○「私は御近所の者でございますが、生來下戸の方で都合によりましたら貴會へ入會致し度いと存じまして、今ハ、ア成程。○「エ、貴郎が會長様でございますか。今イエ私は幹事で會長は奥に居ら

れます、併し何ですか貴郎は下戸と云ひ條、盃に二の三の位は召上るのですか。○「中々どうして一滴もいけません、酒盃で煮ました物を食ひましても直に酔ひまして苦みます。今フ、ーン、それは餘程の下戸ですなア、さうすると貴郎は酒の味はナツとも御存じありませんか。○「味は存じませんが酔ふた覺はございます。今矢張り酒盃の入つた物でも召上つてはどうか。○「イエ注意の上にも注意をして他所の物はウツカリ食ひぬ様にして居りますから、そんな氣遣ひはありません。今それにどう云ふ譯でお酔ひでした。○「どうも十日間

程と云ふものは顔も赤うなりまして毎日フラ〜、フラ〜致しませので、何でもこれは酒に酔ふたのに違ひないと思ひましたが、全然合点が参りませんので色々調べました所が、
 △フン ○「飲料には水道の水より外は使ひませんが、米や野菜物を洗ふのに私の方の井戸水は至て良しいものですから、最初は井戸水で洗ふて後に水道で清滌ぐ様にして居ります
 △成程 ○「固より私の方に酒氣のものは一切有りませんから怪我にも陥りさうな事はございませませんが、誰か来た人が悪戯にでもしたのか、酒樽の香口が釣瓶に付いて上りま

した △ハ、ー ○「それから後は一向酔はぬ様になつた事を考へますと全く其香口の陥つてあつた水で米や野菜物を洗ふて居りましたので、それが爲に酔ふたものとみねます
 △フ、ーン、中々立派な下戸です貴郎は…… ○「それでこれもマア話の種と思ひまして其香口を充分煮出して酒の氣を少しも無い様にしまして私は持参して居ります
 △「へ、エ…… ○「これでございます
 △成程酒樽の香口、手に取つて見るのは始めですが、成程……、これを貴郎が陥つてあつた……、イヤこれが陥つてあつた水で洗ふた物を煮いてお上りに

なつたかちお酔ひなされたのですなア。○「左様でございます。△「それはどうも御尤で……、ゲイー、こりやお酔ひなさるのは御尤……」

○「貴郎何うなさいました。△「ゲイー、酔ひました、ア、大變酔ひました……。○「エ、ッ、これはどうも驚きましたなア、私はその陥つてあつた水で洗ふた物を食べましたから酔ひましたけれども、斯うして持て居る位では別に酔ひもしませんが、貴郎はそれを一寸見ただけで。△「左様……、見ただけで酔ひました……、ア……苦しい。○「これは本真に恐れ入りました、幹事さんが是位なら會長さ

んはどれ程の下戸でございます、スルと境の襖を開けまして會長と云ふのが前に半挿を置いて向ふ鉢巻をして。長「眞平御免下され、只今のお話を承つただけで斯様に酩酊致しました」と云ふお話がございます、豈夫それ程の下戸もありませんが、爰に通常あるべき下戸のお話を序に申し上げます。

×「今日はッ、御機嫌よろしう。□「何じや御機嫌ようなんテ長い間會はん様に、二三日前に來たせやないか。×「へ、エ……、二三日前に來ましたかいなア。□「能う物忘れをする男じやなア。×「平常はそ

れ程忘れもしませんけれども、今日は一寸酩酊してまますので……

□「ハ、ーこれは妙じや、お前は少とも飲けんと云ふ様に聞いて居たが……、成程生來は飲める方じやけれども、何か理由が有つて止

めて居たのかい」×「へい、何か知りませんが今日は酔ふて居ます、

□「自分の事を何か知らんとはをかしいなア、それで二合も飲んで

居るのか」×「い、エこんな大きなので」□「フ、ーン、其位の大きさ

なら并鉢か何かじやらう、そんな大な器で飲つたのかい」×「へい二

枚やりました」□「二枚……」×「へい」□「お前は酒の粕を食つて來た

のじやなア」×「實はさうです」□「酒を飲むのに二枚と云ふ奴がある

もんか、何じや變な様子じやと思ふて居た」×「ハ、ハ、ハ、ッ、私は酒

を能う飲まんもんですから、皆が今時の若い者で酒を飲まんなんテ

意氣地無しじや、などと色々な事を云ひますので、一遍酔ふて見た

いと思ふて居ました所が、先刻酒の粕を貰ふてそれを食ひましたら

パーッと酔ふて來ましたから、こいつは一番酒を飲んだと云ふて友

達を驚かしてやらうと思ふてその……、どうです酔ふてる様に見

ますか」□「見ぬん事もないが、二枚と云ふ様な事を云ふたら一遍に

知れて了ふ、二枚と云はずにこんな大きな器で二杯、と斯う云ひなされ、さうしたら平常にお前は酒を飲まんと思ふて居るから吃驚するに極つて居る。X「成程さうですか、イヤ大きに……」□「モウ去ぬのか、マア遊んで居たらどうじゃ」X「有難う、左様なら……」婆「オ、善さん、わらうヒヨロくして何うしなさつたのじやい」X「イヨ、これは荒物屋の老婆さん、今日はッ」婆「どうしなさつた」X「一寸酩酊を……」婆「ホ、ホ、貴郎はお酒を嫌ひの様に聞いて居たが少とは飲みなさるのか」X「飲みますとも……」婆「マア其位酔ふのは、

大分飲みなさつたのかい」X「へいこんな大きな井鉢で」婆「フウーン」X「二杯飲みました」婆「それは中々飲けますのぢやなア、そして冷で飲みなさつたのかい……」冷酒は毒ぢやせ」X「イ、エ焼いて食ひました。」

◎甘い醫者

○「一寸お尋ね申します、此邊に讃岐の六兵衛と云ふ人はございま

甘い醫者

せんですか △「讚岐の六兵衛……、讚岐の五兵衛の二度焼と云ふ事は聞いた事がありますが、讚岐の六兵衛と云ふのは知りませんな、商賣は何をする人です ○「讚岐の三本松の人で若い時分から醫學が好んで大層勉強しられました、私は百姓の家に生れたが、願くば都會へ出て醫者になりたいと豫て云ふて居られました、先達當地へ引越して参られました、孰れ開業をしたら書面を出すけれども、若しそれまでに大阪へ來たら、讚岐の三本松は砂糖が名物故、なるだけ甘い名にかへるから、其甘い名の醫者と云ふて尋ねてくれと云ふて

居られました、それがまだ開業をせんのかどうか分りませんが古郷では六兵衛と申しましたので、昨日も彼處此處で讚岐の六兵衛と云ふて尋ねましたが、どうしても知れませんが、西横堀とか云ふ所へ参りまして、瀬戸物屋さんで尋ねましたら、私方にありますと云ふて素焼の急須を出して見せました △「ハ、ハ、ハ、此廣い大阪で唯讚岐の六兵衛さんでは分りさうな事はありません、在方は名前を云ふたら端から端まで委しう分りますが、大阪では同じ町に住んで居て顔は見知つて居ても名を知らん人が澤山ある位です、それは何程尋

ねなすつても分りますまい、併しその甘い名と云ふのはどう云ふ名
 であらう。○それは當地へ来て開業する時に思ひつくと云ふて居られま
 したので、どんな名をつけましたか分りません。△フ、ーン、一寸
 お待なされや、コレ昨日か一昨日何やら妙な名のお醫者さんが出来
 たとお前達が話をして居たが、あれは何と云ふ名ぢやつた。×あれ
 は甘井要鑑と云ふので、△さうく、甘井要鑑……×彼方は此間
 から大工や手傳が来て大分普請をして居ました。△そんなら其處か
 も知れませんせ。○左様でございますか、それは何の邊でございますか。

す △何處ぢやいなア。×それは此南横町を一寸東へ入りました北
 側です。△さうか、アノー、此南の辻を一寸東へ入りました北側で
 す。○それはどうも大きに有難うございます……、お頼み申します
 お頼み申します。甘井要鑑、コレ、表に客來があるぞ、誰も居らん
 のか、ナニ、手の放せん事をして居る……、さうか、それでは私が
 出やう……、ハイ、何誰でございますか。○オ、これは六兵衛さ
 ん、御機嫌よろしうございます。甘井要鑑、太左衛門さんですか
 これはようこそ来て下さつた、實はチャンと居付きましたら貴郎の

甘い響き

方なり彼方此方へも書面を出す積りで居りますが、まだ漸く此家へ移りました許りで、併し能う此處が分りましたなア 太「へエ、貴郎が開業する時は甘い名をつけると仰有つて居られましたから、それを目處に尋ねましたので、昨日から随分方々を尋ね廻りました 其それは無お困りでしたらう、私はなるだけ甘い名をつけやうと思ふて種々考へまして甘井要鑑と改めました 太「それは結構でございますいな 其勘藏、一寸來やしやれ、太左衛門さんがお訪ね下さつた、勘「太左衛門さん、ようお越し下さいました 太「エ、御子息は周歲

甘い響き

さんと申されましたが 其「これは勘藏としました 太「へ、一成程、其「コレおさとや、太左衛門さんが訪ねて下さつた 其「これは誠に御機嫌よろしう、國元の方は皆さんお達者でございますか 太「へエ皆壯健でございます……、御家内はおさとさんとなられましたのですか 其「左様で……、コレみつや 太「オ、お嬢さんですか 其「これは、みつと云ふ名にしました 太「成程、貴郎が要鑑で御子息が勘藏さん、御家内がおさとさんでお嬢さんがおみつさん 其「ハイ家内中残らず甘い名にかへました 太「能う行届いて居りますなア、そして

一番年長のお嬢さんは…… 甘「あれは誠に病身で、縁付はいやぢやから尼にしてくれと云ひますので、本人の希望に任して尼にしました 太「左様ですか、それはマア……、それで何方においでになります 甘「大阪から少し西の尼ヶ崎へ参つて居ります、萬一彼の邊へお越しでしたら寄つてやつて下さい、大阪とは違ふて狭い所ですから直に分ります 太「尼ヶ崎の何と云ふ所で 甘「尼ヶ崎の城下（白下）です 太「しろした、成程……、シテ矢張りお町宅でございますか 甘「イエ、庵持（餡餅）になつて居ります」。

◎借家怪

人間は萬事真直にせねばならぬ、歪んではいかんと申します、けれども又其中には事柄によつて歪まねばどうも見悪い、うつりが悪いと云ふ事も往々ございます、年始の禮者が前にさします扇は斜に歪めてさすに限りませ、これを真直にさすと誠に不恰好なものでございます、それからお醫者様が病人の脈を見る時は少し首を傾けますこれも真直にして居りますと、此先生は脈の方に心が入つて居るか

知ら……、と云ふ様な疑が病人に起ります。それから明家の表に貼ります。貸家札、これも必ず斜に貼ります。これはどういふ譯かと申しますと、一枚を左へ歪めればモウ一枚は右へ歪めます。必ず二枚貼るものぢやさうで、それを一所に寄せますと「人」と云ふ字になり又「入」と云ふ字になります。人入で早く借人があると云ふ理屈から割出したものぢやさうでございませぬ、併しこれは皆が皆までさうぢやとも申されませぬ、裏借家などには路次口に真直に貼つてあるのも折々見受けませぬ、此處に家數もさのみ澤山でなく寂寥とした裏長

十 屋で其中程に明家が一軒ございませぬ。〇「一寸お尋ね申します。今ハイ。〇此お隣りに貸家札が貼つてございませぬがお家主さんは何方でございませぬか。△ハ、一、貴郎が借りなさるお積りですか。〇「左様でございませぬ。△家主は少々遠方ですが私の方で分りますからマアお這入りなされ。〇「それは大きに、お宅さんはお家守でございませぬか。△イヤ家守ではありませぬが、何分家主が遠いので望みの人があつたらお前の方で相談をしてくれと云ふて頼まれて居ますのぢや併し見ぬ話はございませぬから屋内を一遍見て來なされ。入口は直に

開きます。○「へい只今開いて居りましたので一寸見せて戴きました
 △「フン左様か……、間取りは私の方と同じ事です。○「誠に御勝手
 ようしてございます。△「餘り勝手がよい事もありませんが、マア裏
 屋で此位なら好いとしておかねばなりません。○「所で附物はござい
 ますのですか。△「少しありますが附物を賣ると借人が變る度に面倒
 ぢやと云ふので附賃になつて居ます。○「それは結構で……、シテ敷
 金は何程でございます。△「敷金は入りません。○「へ、エ……、敷金
 なしの附賃、それはほんまに結構でございますなア……、お家賃は何

程で。△「家賃は月に五圓です。○「成程五圓……、イヤ附賃の敷金な
 しなら其位の事でございませう。△「お前さんは五圓の家賃を高いと
 思ひなされるのかい。○「イエ別段高いとは思ふて居りません。△「それ
 でも附賃の敷金なしなら其位の事でございませうと云ひなされると矢
 張り裏屋の割には高いと思ふて居なされるのぢやらう。成程裏長屋で
 月に五圓と云ふと誰でも安いとは思はんが、いよくあの家を借つ
 てみるとそれが吃驚する程安うなるのです。○「スルと半期に何程と
 か一年住んだら何程とか漸々下げてとも下されると云ふ様な事で。△「

イヤ下げるも下げんもない、あの家に住んだら月に五圓宛の家賃はお前さんが出す事は入りません。〇「へ、エ……どう致しますので、
 △家主の方から毎月五圓宛くれるのです。〇「モシ、雨露を凌ぐ家を貸してもらふて月々に五圓も下さると云ふのはどう云ふ譯でございます……、私は起きて居るのか寝を見て居るのか全然譯が分りません。△起きて居なさればこそ私と話をしますのぢや。〇「サア起きて居るには違ひありませんが、餘り夢みた様な話で……。△イヤお前さんも其處へ氣が付くのは中々感心です、如何にも家主の方が

ら家賃をくれると云ふと大變好い様ぢやが、其處に少し理由があります。〇「其理由と申しますと……。△此事を云ふと家主へは甚だ濟まんけれども、見ればお前さんもまだ若いのに僅か月に五圓位の金を貰ふが爲に命を無い様にさすのもお氣の毒ですから云ふて進げますが、私に聞いたと云ふ事を決して誰にも話してはいけませんせ、それを云ふてもらふと私が家主に濟まんからなア。〇「そんな事は滅多に申しません、全体どう云ふ理由で……。△今屋内を見たと云ひなさつたが、雨戸が開いて居ましたかい。〇「へい開いて居りました

△「前裁が有つて向ふに私の方と同じ様に高塚がありましたらやら
う。〇「へい。△「其向ふ側はお寺の墓地になつて居ます。〇「へい……
△「晝の間は何事もない、日が暮れても宵の間は固より何事もない
が、モウ十二時も過ぎ一時も過ぎ、二時と云ふ時分になると世間が
シーンとする。〇「モシお宅の御家内は貴郎か一人ですか。△「今家裏
は一寸使ひに行きましたたが何か用ですか。〇「モット多勢じやないと
貴郎と二人では氣味が悪うなつて参りますので……。それから二時
頃になつて世間がシーンとすると、どうなります。△「さうする間に

様先をシタツ、シタツ、と人の歩く様な音がします。〇「へ、へ、い……
△「其音がお前さんの耳へ這入ります、と云ふてお前さんはハッ
キリと目が覺めて居るのでもなし、醒れて居る様な心持で、ハテ足
音が止んだなアと思ふて居るとお前さんの身体へシューと誰か乗る
様な重みがかゝる。〇「へエ……。△「スルと……。〇「モシ、モウ少し
ハキ／＼と云ふてもらへませんか、そんな凄惨い云ひ様をせずと……
私は餘程臆病者ですから。△「お前さんの鳩尾の所をギューツと抑へ
よる、苦しいに餘つてフツと目を開いて見るとお前さんの上へ馬乗

りに乗つて居る奴があるのじや……、其顔と云ふたら色蒼白めて髪は禿げた所もあり生ねた所もあり、片一方の目は脹れ塞つて片一方の目をギロツとびいて所々に抜けた長い齒をギューツと剣さ出してお前さんの顔を見てケラ／＼／＼ツ……、〇フワーツ △コレ／＼／＼まだ話がある、オーイ、大變臆病者ぢやなア、入口に置いてあつた灰汁桶をひつくり返して飛んで出て了ふた ×「モシ安兵衛さん、今フワーツと云ふたのは何です △隣の家を借に來たので一寸怪談をしてやつたら吃驚して逃げて行つたのです ×「サア私も一寸聞いて

ましたか、あんな事が實際にあるのですかい △「阿呆らしい事を云ひなさんな、そんな事がありますもんか ×「ありもせん事を貴郎は何故あんな嘘をつきなさんたのです △「其處ですテ、悪事千里と云ふて彼の男が歸つてあれに尾緒をつけて人に話しますと聞いた人が又それに嵩をかけて吹聴します、終にそれが評判になつて隣りの明家を誰も借る者が無い様になります ×「そんな入らん事を仕なさんないなア、何か家主に氣に濟まん事でもあるのなら、それはそれで尋常に話を仕なさんたらどうです、有りもせぬ事を云ひ觸して家に

疵を付けたりするのには餘り男らしうないじやありませんか △「い、
 エ家主には氣に濟まん事も何にもないのですが、斯う云ふ裏借家の
 事ですから御同前に庭が狭い、サア冬になつた莖文字を漬けにやな
 らん、ソレ香物を漬けにやならんと云ふて庭へ漬物桶を置くのと狭ふ
 て適ひません、又夏になつて干物をする、ソレ夕立じや取入れにや
 ならんと云ふ時などは此狭い裏で竿竹を振り廻して大騒動です、そ
 こで明家が二軒有つてみなされ漬物桶は入れて置けるワ、干物は取
 入れられるワ、長屋中の物置になつてよろしいでせう ×「成程さう

云ふ積りですか…… △「さうですから又借人が來ましたら私所へ遣
 しなされ ×「さうしませう、私は逆もあんな氣味の悪い云ひ様は能
 うしませんから △「よろしい、私はどんな奴でも恐がらしてやりま
 す」と云ふて居ります所へ今度は一寸勇肌の方が □「此隣りの貸家
 はまだ明いてるのかい △「ハイ明いて居ます、借人ができたら貸家
 札を剥して了ひます □「ハ、ン、家主は何方じやい △「家主は大分
 遠方です □「さうか……、此近所に家守でもないのか △「別に家守
 と云ふてはないが、私所が萬事頼まれて居るのじやからマア這入り

なされ □「そいつは宜い所で聞いたわい……、お前所は大層綺麗にしてあるなア △「居職じやから取散らして居て餘り綺麗な事はありません、併し屋内は見えておいでなかつたのかい □「今入口が開いて居たので一寸見て来た △「ア、左様か □「附物や敷金は…… △「附物はありません、一切附貸で敷金も入りませんのじや □「そいつは結構、そして家賃は △「家賃は月に五圓 □「月に五圓……、馬鹿にしてるなア、敷金は入らんの附貸じやのと旨い事を吐して置いて、あんな家を月に五圓なんテ能う吐したな、撲倒してやれ △「コレか

前さんは家を借りに来たのか喧嘩をしに来たのか □「ソリヤ別に喧嘩をしに来たのではないが △「そんなら私の云ふ事を終まで聞きなされ、成程あんな家を月に五圓と云ふと一寸聞くと高い □「一寸じやない、驚り聞いても高い △「それがあの家を借ると安過ぎて吃驚せにやならんせ □「フ、ーン、這入つてから負けてくれるのか △「負けるも負けんもお前さんが其家賃を出すのじやない □「誰が出すのじや △「あの家に住んだら家主から月に五圓宛くれるのじや □「ア、さうか……、そいつは安い、是非貸してもらはう △「コレ、待

ちなされ □「何じや △「雨露凄々家を賃して無賃でもあることか、月に五圓宛もくれると云ふのに付てはそれだけの理由がある □」どんな理由があつても構はん、月に五圓宛もくれると云ふのならこんな旨い事はないが、其理由と云ふのはどんな理由じやい △「あの家の前裁の向ふがお寺の墓原じや □「ナンノそれ位の事なら構ふ事はない、俺が借る △「イ、ヤそれ位の事なら誰でも差支はないが、あの家に住むと夜少とも寝られんのぢや、家は寝る爲に借るのじやらう □「何程寝られいでも俺は餘程寝坊じやから能う寝るせ △「どれ

程寝坊でも寝られん理由が其所にある □「その理由を早う云ひいなア、愚圖々々と辛氣くさい △「マアお前が寝るじやらう □「フン、△「十二時、一時頃までは何事もない □「フン △「モウ二時となると世間がシーンとする □「知れた事を云へ二時にもなつたらシーンとするのは當然じや、花街でも其時分には寂寞するせ、そんな事は構はん、俺が借る △「マア待ちなされお前は二言目には借る々々と云ふて居るなア……、それは夜中の寂しいのは當然じやが、その世間がシーンとして来ると様先をばなア、シタツ、シタツと濡れた藪

艸履さうりを穿はいて歩あるく様やうな音おとがするのじや □ハ、ーン、ド狸たぬきじやそれは……、そんな事こと位くらい頓とん着ちやくあるもんかい △イヤ、それだけじやない

□「まだあるのなら早はやう云いひいなア此人このひとは…… △「さうすると戸との隙すきま間まから生なま温ぬくい風かぜがスーと這はい入いつて來くる □「宜よいかなア夏なつは涼すいしいて △「マア聞ききなされ、スルとお前まへの枕まくらもと元の灯ひをフツと消せす奴やつがある □「それは徳とくじや、寢ねて居ゐる間あひだは灯ひがあつても無なうても構かまはんから消せしてくれたら油あぶらが入いらいで經かん濟ぢやうじや △「そこで目めが覺さめて暗くらいで四あ邊たりを見廻みまわすと、庭にはの隅すみから火ひの玉たまがコロ／＼／＼ツと轉ころがつて來くる

□「幾いくつ △「一つぢや □「一つでは足たらんंनाア、マア夏なつはどうでもよいが、冬ふゆは二ふたつ三みつあつたら一つは火こたつ燧いへ入れて、一つは……

△「コレ炭た團どんじやないせ……、そして其その火ひの玉たまがパツと破やれると薄うす汚よごれた白しろの着ま物ものに髪かみをふり亂みだしてサモ怨うらみさテな顔かほをした女おんなの幽ゆう霊れいがスッ、と出でよるのじや □「ハ、ーン、それは構かまはん、俺おれは此この通とほりガラ／＼した人間にんげんで他人ひとにそんな怨うらみを受けうける様やうな覺おぼえがないから、それは人ひと違ちがひじやらうと云いふて顔かほを見みせてやる、さうしたら幽ゆう霊れいも得とく心しんしよるじやらう △「イヤお前まへさんに怨うらみが無なうても、あの

家に住んだ者に怨みを云ひに出るのじや □ スルと幽霊があの家の
 附物みた様なもんじやな △ マア、くそんなものじや □ 女の幽霊
 なら大抵分つて居る、あの家で死によつた奴で死際に亭主が外に女
 でも拵へて薄情な事をしよつたのじや、ナア、それを憎いと思ふて
 死んだので未だに迷ふて居るのに違ひない、ヨシ俺が云ふて聞かし
 て嫌にしてやる、俺はまだ鰥じやから △ 幽霊を媽にする…… □
 第一徳用じや、着物は白いのを一枚着せて置いたら宜いし、帯は入
 らん、髪は年中振捌いて居るから髪結賃は入らん、足がないから下

駄は入らん、こんな徳な媽は他にない、マア兎も角俺が借るから家
 主の方へ家賃を滞らさん様に頼みますと駄目を押しといてくれ、頼
 んだせ…… △ オイ、コレ、オイ、到頭去んで了ひよつた、何を
 云ふても恐がらん奴なア…… × 安兵衛さん △ ヘイ × どうでし
 た △ 今度は何を云ふても恐がらん奴で、終に女の幽霊を出してや
 つたら嫌にしてやるなんテ云ひよるので × それはどうでもよろし
 いが、家賃を滞らさん様に駄目を押しして置いてくれと云ふて去んだ
 様ですが、大分手荒さうな奴ですから後で間違ふたら承知しますま

いせ △と云ふた所で今更仕方がありませんから、一月だけ長屋中頭割で出してもらふ事にでもして其間に何とか工夫をしませう、私も悪う思ふてした事ではないのですから、一月だけさうでもしてもらはんと仕方がありません △所で借人が出来たら家主の方へも五圓拂はにやなりません △成程両方へ入りますなア……、これは貴郎と私とが先刻話しをして居たのを聞いてよつたか何かに違ひありません、私が思ふのには彼奴も口ではあんな強い事を云ふて居ますが口程でもなさうですから、いよく這入りよつたら一つ化物

を出してやりませう △化物を出すとは…… △近々に雨の降る日がありましたら、彼奴は鯉の上に乗れつばら者に極つてますから毎日手まめに總菜を拵へる様な事はありますまい、よつてに近所から親切さうに何か辛う々々煮いて持て行てやりませう △へいへい △それで彼奴が晝飯に一杯飲つて一寝入りして今度目が覺めると喉が渴いて堪らんから茶や水をガブ／＼飲みよるに違ひありません、さうして日が暮れたら直に二軒ある長屋の雪隠の一軒の方を開かん様に釘付にしておいて、一軒の方の肥取口から踏板の下へ這入つて待

つて居ますと、前に水や茶をガブ／＼飲みよつたものですから小便がしたうなる、そこへ少し下痢の氣味で雪隠へ行きたうなります、來てみると片一方の方は開きませんから先から這入つて待つて居る方へ這入ります、そこで蹲つたら下から尻をガサ／＼と撫てやる、と吃驚しよるに極つて居ますせ、×「併し誰が其踏板の下へ這入つて居るのです、△「マア差當つて貴郎ですなア、×「いやですがなア、そんな穢い事を……、△「さう云はずとやつてみなされ洒落ですから、×「何程洒落でもそんな事が出來ますもんか、△「マア宜しい、何と

か工夫を仕ませう」と却て長屋の方に葛藤が出來て居ります、こちらの男は家賃を出さずに家主から五圓宛くれると、上下十圓違ふ勘定でこんな旨い事はないと云ふので、餘計な道具もないものですから其日の間に引移つて了ひました、所が前には強い事を云ふたもの、矢張り氣味がよくないとみねて、當座は友達を二人頼んで泊りに來てもらうて居りましたが、モウ十日、半月と經つても猫の子一疋も出ませんから、これは長屋の奴が黽つたのか但しは根もない世間の惡説ぢやらうと、追々住馴れまして一人で寝る様になりました

兎や角する間に二十日餘も経ちました、或日の夕方に二人連で参りましたのは友達と見なしまして、甲「オイ此裏に違ひないか、乙「違ひない、甲「一昨日の晩に来てくれと云ふて居たけれども仕事の都合で能う来なんだ、乙「私も風を引いて居たので能う来なんだが、何でも南側の中程ぢやと云ふて居た、甲「一寸お尋ね申します、此裏に此頃轉宅して来ました彌太郎と云ふ者はありませんか、乙「彌太郎さん所は一軒隔いて隣りです、甲「それは大きに……、オイ此家ぢや、彌太在宅か、オイ彌太……、どうしたんぢや寝てよるのかいなア、オ

イ彌太……、何處かへ行きよつたらしいせ、けれども入口に錠もおろしてないから一寸近所まで行つたのぢやらう、マア這入つてみよう、乙「成程家主が獨身者に家を貸すのを厭がる筈ぢや、焜爐にグツン、火を熾しておいた儘で用心の悪いなア、甲「併し火が熾してある位ぢやから直に歸つてくるに違ひない、上つて待つて居てやらう……、オイ此處に火鉢があるから其火を少し取つてくれ、上り口に行燈が出してあつたから灯を點して、それから其膳棚に何かないか、乙「焼豆腐の煮たのがある、甲「さうか、それを此方へ出して酒は俺

が提げて来たから一つ熱燗にして一杯飲つて居やう、其間に歸つて来るぢやらう」とゴテ／＼云ふて居る間に二人して提げて来た一升徳利をコロツと空けて了ひました。乙「未だ戻つて來んがどうしたんぢやらう 甲「あんなつばらな男ぢやから、大方買物でもした歸途に風呂へでも這入つてよるのぢやらう 乙「何程つばらでも日の暮時分に締りもせず風呂へ入つてる様な事はなからう 甲「そこがあんなつばら者ぢやからなア 乙「お前はさう云ふが、私はさう思はん 甲「そんならどう思ふ、お前は…… 乙「此家は化物が出ると云ふ事を聞

いたせ…… 甲「それはどうやら嘘らしい、彌太が此家へ來てからもう二十日程も經つが何の事もないさうぢや 乙「イヤ萬更無い事は人が云はん、全体ボロ過る、家賃を家主の方からくれるなんて、世間で安い物と化物はないと云ふが、こんな安い家ぢやから化物があるに違ひない、私が思ふのには今夜いつまで待つても歸つて來ないので夜が明けてから探してみると、床下から彌太の首が出たり押入から腕が出たりする様な事かも知れんせ…… 甲「そんな馬鹿な事があるもんかい 乙「さうかて又明日でも來るとして今夜はモウ去んだらど

うぢや 甲「それはいかん 乙「何故 甲「他人の家へ行つて其家の人が不在ぢやつたら直に歸ればよいが一旦内へ這入つたら、誰か歸つて来るまで其家に居ん事には、自分が歸つた後へ若し盗人でも這入つた時は、どんな事で自分が疑はれるかも分らん 乙「難儀ぢやなア：
 … 甲「ヨシ、俺が面白い事をしてやらう、彌太も大して度胸のある奴ぢやないから化物を拵へて嚇かしてやる 乙「どうして化物を拵へる 甲「斯うつと其道具箱に針金がないか知ら……、有つたくこれ
 で此茶瓶を火鉢へ括りつけておいて、それから此竹の皮を行燈の鞘

の間へ斯う狹んでおいてやる 乙「フン、フン 甲「さうして灯を消しておくと彌太が歸つて来て一番に灯を點さうと思ふて行燈を開けるとパリ〜とわらい音がする、今度は茶瓶を抜かうとすると火鉢へ黏着いて抜けん 乙「成程 甲「それから佛壇の中の甕を持って押入へ這入つて居て、それをチン〜、と鳴らして戸をガサ〜と掻いてやる 乙「フン 甲「それでもまだ恐がらなんだら、此着物の上へ鉢や茶碗を載せておいて此處に細曳があるからこれを付けて、押入の中から引張つてやると、鉢やら茶碗がガチャ〜とひっくり返

る、これだけ行つたら大抵の者は吃驚しよるせ……乙「こいつは面白いなア、やれく」甲「待てよ、細曳が大分長いから其端を少し切つて徳利の口を括つて入口の所へブラ下げておく」乙「それをどうする」甲「暗と云ふものは假令自分の宅でも小腰を屈めて這入るものぢやから、這入る時はどうもないが、出る時は吃驚りして居るから一散に駈出す柏子にコッシーンと頭へ當る」乙「危いなア」甲「さうぢや、彌太は俺より背が高いから俺の背に合しておいて鼻でも打つといかん……ア、たしかお前と彌太とは同じ背ぢやなア」乙「フン」甲「ん

んなら此處へ立つてみてくれ、恰度額の所へ當る様にしておかんと危いから、シツとしていよ……ヤアツとこの位でどうぢや」乙「ア痛ッ、コラ無茶をするない、見當を取るだけかと思ふて居たら突然にコッシーンと眼から火が出たかと思ふた」甲「モウ一遍シツとして居てくれ、工合よういくかいかな……」乙「ア、いくく」甲「サ、灯を消すから鉦を忘れん様にせいよ」と二人が支度をして待つて居ります所へ、本人の彌太が歸つたら驚く中にも二十日からも住んだ我家の事ですから左程でもありませんが、こゝへ來たのは家移りの



晩に馳走になつて其儘來なんだので、今夜其禮がてらに参りました彌太の友達で、此男が又大變な臆病者、折の悪い時に來たものでございます。丙「嘘ぢやさうなが化物が出ると云ふ様な事を聞いたので此裏へ這入るのは何となう氣味が悪い……、彌太はん今晚は、彌太はん、不在かいなア、それにしては入口に締りもしてないし、寢てるのかいなア、彌太はん……、轉寢をしたら風を引くせ灯も點さずと、私を恐がりやと思ふて吃驚さしたりしたらいかんせ……、ア、此處に行燈がある」ハリハリ……、丙「何じやいなアハリハリ」と



……、彌太はん、茶瓶がシユン／＼沸いて噴出してゐるせ……、どうしたんや茶瓶が振けんがなア、彌太はん……」さうする間に押入の中で、ナシー、ガサ／＼／＼、細曳を引張りましたからガチャ／＼／＼ツ 丙「フワ／＼ツ化物が出よつた……」と走つて出やうとすると、一升徳利で頭をコッソソ、丙「痛いッ、矢張り出よつた、誰ぞ來てくれ……」□「どうしたんじやいこんな所へ平伏つて、吉じやないか 吉オ、彌太はんか、出た／＼／＼、お前所の宅に化物が出よつた……」彌「そんな事があるもんかい、モウ二十日からもなるが

何一つ出た事はない。言、今夜初出じや、入口に締りもしてないのに、何程呼んでも返事をせんよつて、轉寐でもして居るのかと思ふて、恐々這入つてみると上り口に行燈がわつたから、灯を點さうと思ふて手を掛けると、パリ／＼と鳴きよるのじや。彌「行燈が鳴く……言、それから茶瓶が噴出して居るので抜かうと思ふても火鉢に黏着て抜けん、スルと奥の方で、ナン、ガサ／＼、グワチヤ／＼とぬらい音がしたから吃驚して出やうとすると入口の所で頭をコッーンと擲りよつた、化物の手は堅い冷いもんじやせ……彌「それは

お前が恐い々々と思ふて居るから、何かつまらん事で吃驚したんじやらう、俺も直に戻る積りじやつたが、一寸買物をして歸りに卯之助の宅へ寄つたら、夫婦喧嘩をして居るので宅は氣になるけれども其儘戻る事もできず、仲裁をして居たのでツイ遅うなつた……、モウ一遍来てくれ。言、イヤモウ御免じや。彌「そんな事を云ふない、俺が付いて居るから心配すな……、オイ、お前が来た時簀戸が開いて居たか。言、イヤ閉つて居たけれども、出る時は命から／＼じやつたから、中々元の通りに閉めて居る様な事は出来なんだ。彌「兎も角這

入つて灯を付けてみやう……、ハテナ 言「どうじゃバツ／＼云ふじやらう、茶瓶が火鉢へ粘着いて抜けんせ 彌「どうしたんじやらう……、言「ウソ 彌「マア此方へ這入つてくれ 言「私はモウ此處に立つて居る 彌「そんな事を云はんと此方へ這入つてくれ、お前の後に何やら眞黒なものが立つてるせ 言「ソ、そんな入らん事を云ふない……、ナア彌太はん 彌「エ、言「モウこんな家早う轉宅したらどうじゃ、何程金をくれても命あつての物種じやせ 彌「ウン轉宅する、大分氣味が悪うなつて來た」話して居ますと押入の中からチン！

ガサ／＼／＼、クワチヤ／＼／＼ツ 彌「ヒヤ／＼ツ出よつた、早う逃げ……」今度は二人ながら路次口へ平伏つて了ひました 彌「ア……到頭出よつた、昨夜まで何にも出なんだのに今夜一時に仰山出よつた…… 言「化物も彼方此方廻つて居て、今夜歸つて來よつたんじやらう 彌「さうかも知れん……、初めに長屋の奴に強い事を云ふたら、こんな所に平伏つて居ては体裁が悪いなア 熊「誰じやいそんな所に平伏つて居るのは…… 彌「熊五郎はん私です 彌「彌太郎か、どうした 彌「今夜私の宅へ化物が出ました 彌「何を吐すのじやい、化

物なんテ此世の中にあるもんかい 吉「サア私もさう思ふてましたけれどども…… 熊「何じや、そつちにもまた居るのか 彌「吉です、一緒に逃げて出ましたので 熊「意氣地なしじやなア、二人ながら至て大きな體軀をして其醜態は何じや 彌「さう云ふてなはるけれど貴郎でも吃驚しますせ…… 熊「阿呆を吐せ、俺が見届けてやるから一緒に来い……、サア這入れ 彌「マア貴郎からか先へ 熊「我家へ這入るのに何が恐い、子供みた様な奴じやなア 彌「其上り口にある行燈が鳴きます 熊「フ、ーン成程バリ〜云ふなア 彌「云ひますでせう、そ

れから其茶瓶が火鉢に粘着いて抜けません 熊「ほんに妙じやなア……、オイ燐寸は何處にある 彌「其火鉢の抽斗にあります 熊「ヨシ有つた、マア灯を點さん事には分らん、彌太いつまでも舊弊な洋燈にしたらどうじやい 彌「獨身者ですから洋燈は用心が悪いと思ふて、熊「ハ、ーア、これは行燈がバリ〜云ふ筈じや、鞘の間に竹の皮が挟んである 彌「ほんになア、化物テ種々の事をするもんですなア 熊「馬鹿な事を云ふな、それ此通り茶瓶も針金で火鉢へ括りつけてあるワ 吉「それから先刻に奥の方でグワチャ〜ツとぬらい音がし

ました 熊「ほらい音がした筈じや、着物の上へ茶碗や鉢が載せてあつたとみねて皆ひつくり返つて破れて居る、化物でも何でもありません 熊「一体何奴がこんな事をさらしたんでせう 熊「マア喧しう云ふな、何處かで噂を聞いて居る聲がする様じや……、押入の中らしいぞ」戸を開けますと先刻二人を恐がらしてそれが面白かつたのと追々酔が廻つて来たので、押入の中で能う寝て居ります 熊「コレ彌太公此方へ上れ、化物の正体を見せてやらう 熊「へ、エ……、化物テどんなものです 熊「どんなものもこんなものもない、汝の知つ

て居る奴じや 彌「阿呆らしい、私は化物に交際はありませぬ 熊「マア一遍上つて来いと云ふのに……、これ見い、萬吉と助公じや 彌「エツ、何をさらしくさる、こんな事をして吃驚させやがつて、おのれツ 熊「コレ待てツ、相手が寝て居るものをそんな物で擲つてどうする、向ふは洒落でした事じやないか 彌「イエ洒落でも事によります、こんな悪洒落をしやがつて、畢竟私の度胸が緊乎して居たればこそ 熊「何が緊乎して居るもんか、マア向ふは洒落でした事に違ひないのじやから此方も洒落でそれだけの返報をしてやれ 彌「どう

したら宜しい 熊「斯うつと何ぞよい事がないか知ら……、オ、ある
 く幸ひ俺所に澁紙を貼らうと思ふて澁を買ふてある、まだ急に起
 きさうにもないから、それを籠に入れて来て機嫌よう起して、マア
 麥酒を一杯やれと云ふて澁を飲ましてやらう、常からあつかましい
 奴じやから乾度飲みよるに違ひない 彌「そいつは飲みます、さうで
 もして返報をしてやらんと腹が得心しません 熊「それでは澁を取つ
 て来てやる吉彌「私等も一緒に行きます 熊「さうか、そんなら一緒に
 来い」三人は連立つて出て行きました、こちらの二人は能う寝て居

りましたら澁を飲まされたかも知れませんが、一人の方は戸の開い
 た音で目を覺ましました、されども今起きたら場合が悪いと思ふて
 寝た振をして居りましたので 萬「オイ、コレ 助「ムニヤムニヤ」
 く、又鳴らすのか」チン！ 萬「いつまでチン！く鳴らして居るの
 じや、オイ 助「ウン何じや 萬「今、彌太と吉とが熊五郎はんと一緒
 に這入つて来てなア 助「フウン、熊五郎はんと……、到頭頼みに行
 きよつたのかいなア 萬「どうでそんな事じやらう 助「何處に居る三
 人は 萬「今又三人ながら出て行つたが、先刻彌太が怒つて私等を擲

りかけたら、熊五郎はんが、そんな事をしてはいかん向ふは洒落で
 した事じやから、此方も洒落で返報をしてやれ、幸ひ俺所に澁があ
 るからそれを罎に入れて来て、麥酒じやと云ふて飲ましてやれと云
 ふて今取りに行つてるのじや、勘そんな物を飲まされてどうなるも
 んか、今の方に逃げて去なう、萬逃げて去んでは面白うない、モウ
 一遍今度は熊五郎はんぐるめに欺してやらんと、裏の裏をかくとは
 此處の事じや、何ぞよい工夫が…… ●今晚は、彌太はん今夜はど
 うですな、萬オ、恰度よい、背高按摩が来た、オイ按摩、萬エイ、

萬一寸道入つてくれ、萬ハ、ア彌太はんと違ひますなア、萬彌太
 の友達じや、萬仕事ですか、萬イヤ仕事じやない、お前に一寸頼み
 があるが行つてくれんか、萬どんな事です、萬此處へなア、高入道
 を拵へやうと思ふのじやが、お前を其高入道の頭になつてもらひた
 い、萬どうしてなります、萬どうしてと云ふてシツと寝てたらよい
 のじや、俺とモウ一人の友達が胴と足になるから、萬へ、エ……成
 程、萬奥にお前が寝て居て、それから二人繋がつて上から蒲團をか
 けて置く、萬へい、萬そこへ彌太が歸つて来て、こんな所に誰

やら寝て居る、足は上り口にあるが頭は何處にあるのじやいなアと思ふて、お前の所へ行きよつたら其購みた様な目をむいて噛もかーと云ふてくれ 茲よろしい行きませう、併し何程貰へます 萬二十錢やる 茲二十錢では安いなア 萬こんな事に相場があるかい、安いの高いのと 茲三十錢出せませんか 萬ヨシそんなら三十錢やらう……、寝て居て三十錢も儲かるなんテ、こんな楽な仕事はないせサア早う繋ぎ合して灯を消して置かんと、モウ戻つて来る時分じや 助、まだ早いかなア 萬戻つてから灯を消したりして居られるもん

か、モウ物を云ふたらいかんせ」と待つて居ります所へ 熊五郎はん、今度は今初めて戻つたと云ふ様にして遣入りますから貴郎は此處で待つて居て下さい、吉、お前も此處に居てくれ吉熊ヨシ 熊モウ正体が分つたら大丈夫です……、ア、又灯を消しよつたのかいなア……、オツとこんな上り口に誰か寝てよるせ……、ハ、ーン水か茶でも飲みに来よつて又そんなり寝て了ひよつたのぢやなア、イヤ蒲團を着てよるぞ……、今夜泊る氣になつてくさるのか、人を馬鹿にしやがつて……、ア、大變背の高い奴じやなア、モシ熊五郎は

ん、こんな所に頭のない奴が寝て居ます 熊頭のない奴があるかい
 吉、汝も這入つて見て来い 熊「それでも上り口に足があるのに、臺
 所にまだ頭がありません、一体何處に頭があるのじやいなア……、
 有つた々々々、熊五郎はんこんな奥に頭がありました 熊「ヨシ有つ
 たか、緊乎捕まへていよ、今灯を點すから…… 熊「こんな坊主の奴
 です、又同類が殖へたとみねます、ヤア此奴は私がいつも揉ます按
 摩です、おのれ糞ッたれ奴が 熊「彌太はんですか、瞞もかー 熊「ソ
 何を吐すのじやい、おのれまで同類になりさらして…… 熊「イエ私

は同類じやないので、貴郎所へ今晚は仕事はどうですと尋ねに来ま
 したら、お友達の人が斯う々々じやから高入道になつてくれと頼ま
 れましたので、一寸洒落になア…… 熊「仕様もない事をするない、
 灯を點して見たからよかつたが、暗で何を怪しいものじやと思ふて
 擲りでもしたらどうする、人の不在中に来てこんな悪洒落をしたの
 じやから誰にも不足を云ふ事は出来まい 熊「それはさうですが、寝
 て、三十錢も儲かる仕事ですからツイその…… 熊「頼まれる事にも
 よりけりで、僅か三十錢位の錢が欲しさに、こんな危い仕事をする



とは、汝も餘程腰の無い奴じやなア、其成程、腰はどうやら逃げてしまひました。」



◎自在丸

世の中の事は何事によらず、益進歩して参りますが、先づ日本で當今第一番に進んで居りますのは、陸海軍じやさうでござります、陸軍には機關砲など、云ふ調法なものがござりまして、一分間に何百發



と云ふて放てるさうで、實に恐ろしいものがござりました、海軍には追々よい軍艦が出來ますし、又工學博士の下瀬と云ふお方が發明なされました火薬を露西亞との戦争にお使ひになりましたが、其功力は大したものので、爆發力は世界第一でござりますさうな、それから無線電信と云ふのは空中を傳はして此方の思ふ事を先方へ通知がでさるのじやさうで、我々無學な者が聞きますと全然うそみた様な氣が致します、其次に進歩しましたのは醫學で、藥にも種々よいものができて参ります、或る醫者様に聞きましたら、従前は破傷風どか

實布的里亞などにかゝると、十中の九分九厘までも死にましたさうですが、現今は誠に結構な薬ができましたして、手當さへ早くば十人の者は十人ながら助かると云ふ事で實に有難い世の中になりましたと云ふさいます、扱爰に薬學に達したお方がございまして、自在丸と云ふのを發明なされました、此薬を一粒服みますと、禽獸魚蟲どんなものにも自分の思ふものになれると云ふ奇妙な薬で、斯ういふものが出来たと餘程注意をせねば悪心のある人はどんな事を企むかも知れません、併し實地試験をした上でないと世間へ發表する事がで

きませんから、自分で試してみやうと云ふので先づ最初は雀になつてみやうと其薬を一粒服みますと、望み通り雀になれまして空中を自由に翔け廻れます、今度は水中のものになつてみたいが何がよからう、一番鯨になつて築港から大海へ出てみやうと一粒服みますと大きな鯨になれました、そこでだんく沖へ出まして熊の浦沖をウロく泳いで居りますと、こんな大きな鯨は未だ見た事がないと云ふて漁夫が多勢集つて銛を打つ準備をして居ります、それを見て形は鯨でも心は人間でございすから、これは敵はんとズンく逃

げで参りますと、向ふから獵船が一艘参りますので、これを一つ呑んでやらうと大きな口を開いてガブーツと全吞にしまして其儘木津川口の方へ這入つて來ますと、身体が大きいので中々川を上る事が出来ませんから、今度は反對に極く小さなものになつてみやうと、丁斑魚になつて成るべく流れの緩い所をチョロ／＼上つて参りますと、川岸に遊んで居ります子供が其丁斑魚を手で拵ひ上げて、ブリキで拵へた玩具の庖刀で二つに切りますと、腹の中から獵船が飛んで出ました。

◎欠伸指南

甲「オイ、何處へ行くのじや」乙「別に何處と云ふ目的はないが、宵寝をするに若いくせに夜中に目が覺めて困るので、十時か十一時頃まで何處かで遊んで來うと思ふて」甲「それは恰度よい、私に付合ふてくれんか」乙「折角ぢやが今夕飯を喰つたばかりでなア」甲「イヤ物を喰ひに行くのぢやない、私は稽古に行くのぢや」乙「お前が稽古に……、それは猶更御免蒙る、お前の稽古にはモウ懲々した」甲「どう

して「どうしてもないもんぢや、お前は忘れたか知らんが私は一生にこんな辛い事はないと思ふたから能う覺えて居るせ、初めは三味線の稽古に行くから付合へと云ふので、少しは弾けるのかと思ふて一緒に居つて見ると、中々ナントンシヤンが碌に弾けんと云ふ有様ぢや、甲「さう〜、そんな事があつたなア、乙「其次が舞ぢや、いやだと云ふものを無理に付合ふてくれと云ふから行つて見たが其不器用な風と云ふたら眞實に無かつたせ……、腰を屈めて大きな手を廣げて、全然疝氣病人が河を渡つて居る様な腰付ぢやつた、甲「さう

悪口を云ふもんぢやない、乙「イヤ、當り前に云ふて居るのぢや、甲「それで舞は直に止めて了ふた、乙「それは能う止めた、いつまでも行つて居たら何程耻をかくか分らん……、それから其次が淨瑠璃の稽古に行くから又付合ふてくれと云ふので、淨瑠璃ならチツとは聞けるかも知れんと思ふて付合ふた所が、其時のお前の言艸が面白い、俺は腹が丈夫で咽がよいから今度なものになるに違ひないと、聞いてみるとそのウーと唸る聲が何とも例へ様のない胴間聲で、噴火山が破烈した時に大蛇が苦んで居る様な、どう考へても人間の聲とは思

へなんだ、スルと師匠も如何な事堪り兼たか、一寸御免と云ふて三味線を其處へ置いて立つて行つた、それにお前は氣も付かずに「夕顔棚のこなたより顯れ出たる武智光秀……」と夢中になつて怒鳴つて居る、それもよいが、ウー、ウーと唸る聲で隣から嫁さんが走つて来て、わらう唸り聲が聞えますがお醫者を呼んで來ませうかと云ふので、イエ違ひますと云ふ事も出來ず、へい御親切に有難う存じます、併し別に大した事もない様ですからそれには及ぶまいと思ひますと云ふたら、嫁さんも少し様子が違ふと思ふたか、どうぞお大

事にと云ふて歸つた、其跡へ巡查が這入つて来て、時節柄變な容体なら届けんといかんと云ふのぢや、これには隠す事も出來んから、イエ病人ではございませぬ、淨瑠璃の稽古をして居りますのでと云ふと巡查も噴出して歸つて了ふた、虎列拉か赤痢と間違へられて居るのぢや、甲「イヤ今度はその様なものと違ふ、乙「それからまだある、活潑でよいと云ふて柔術の稽古に付合はした、其時私が意見をしたのをお前は覺えて居るぢやらう、舞や淨瑠璃は怪我をする様な事はないが、そんな荒い事をして手足でも挫いたら一生不具になつて了

ふから止めた方がよからうと云ひつゝ、日本橋まで来ると向ふから
 来る男を投げて見せると云ふから、そんな入らん事をせいでもよい
 と云ふて居る間に、お前が其人の胸倉を取つたかと思ふとドブリン
 と云ふ音がして川の中で助けてくれ、と云ふて居るのがお前ぢや
 仕方がないから此男は少々發狂して居りますのでと云ふて、漸う謝
 罪つて堪忍してもらうた、モッお前の稽古に付合ふのは閉口ぢや、
 甲「今度はそんな危険なものとは違ふ」乙「一体何を習ひに行くのぢや
 甲」その……何ぢや」乙「何ぢやでは分らん、ものによつて又付合は

ん事もないが、甲「實は欠伸ぢや」乙「欠伸……、欠伸と云ふと退屈な
 時に出る彼の欠伸か」甲「さうく」乙「戯語ぢやないせはんまに……
 お前は何たる因果な性分ぢやらう、両親は早う死んで幸ひぢや、今
 まで生きて居たらどれ程心配するか知れんせ、マア此廣い世界に欠
 伸を稽古する奴があるかいなア」甲「さうボロソソに云ふけれども、
 此世の中にあるものは何かそれだけの取得があつて、皆無用に立た
 んと云ふものはないさうな」乙「それはさうでも欠伸が何の用に立つ
 人の前ですれば失禮ぢやし、或人が欠伸は睡氣のさす時に出るもの

欠伸指南

ぢやから、事に依つたらモルヒネが取れるかも知れんと云ふたさうぢやが、多分それは狂人か何かぢやらう 甲「お前は悪口ばかり云ふが通常ハアーと出る欠伸なら別にそれを指南しやうと云ふ筈がない何かそこに違ふ所があるとみえて、其證據に此横町に二間半間口で欠伸指南所と云ふ立派な看板が出て居る、まだ開業してから二三日にしかならんが、愚圖々々して居て他の町内から稽古に来るといかん、誰も行かん間に勉強しておいて、友達が来る時分には私が代稽古の一つもする様になつておきたいので 乙「誰がそんなものを習ひ

欠伸指南

に行くもんか 甲「今日初めて行くので一人では体裁が悪いから何卒一緒に来てくれ 乙「難儀ぢやなア……、それでは一緒に行つてやるが、他の友達に私が欠伸の稽古に付合ふたなんテ云はぬ様にしてくれ、外聞が悪いから 甲「ヨシ分つて居る……、ッレ此家ぢや 乙「成程立派な看板が出て居るなア、併しこんな立派な看板を出してつまらん事を教へる奴もあるもんじや、ドレ此處で御免蒙らう 甲「オイ入口までなら別に頼みはせんせ、内へ這入つてからが体裁が悪いので付合ふてもらうたのじやから、マア一緒に這入つてくれ……、へ

イ今晚は……○「ハイ誰方 甲」私は町内の若い者でございませうが、一寸お門前を通りましたら欠伸指南と云ふ看板が出て居りますので、どうか一つお稽古を願ひたいと思ひまして ○「左様か、それはくどうぞ此方へお上り下され、實は御町内へ御挨拶に出やうと思ふて居りますが、まだゴタ／＼して居つて能う出ません様な事で……、お連のお方どうぞお通り下され 乙「イエモウこれで結構です 甲」先生、今日は私だけで彼の人には商用で十日間程不在になりますので歸つてから願ひ申すつもりでございませう ○「左様ですか……、見れ

ばまだお年も若い、貴郎方の年輩では三味線とか浄瑠璃とかをお習ひなさるのが通例ですのに、それに欠伸の稽古を仕やうと云ふのはどうも感心なお心掛です、日本も中々進んで來ましたなア……、欠伸は第一腹の中の悪氣を拂ふて精神を爽快にします 乙「チヨツあはらしい、我田へ水を引いて能うあんな勝手な事が云へたもんじや ○「併し欠伸にも種々ありますけどどういふのがお望みで 甲「何分初めの事でどういふのが宜しいか私に分りませんが、先生矢張り通常ハリアと出る彼の欠伸でございませうか ○「それは孰れ口から出るの

に定つて居ますが、あれは駄欠伸と申して別に稽古をするには及び
 ません 甲「それでは何か難かしい秘傳でもございますのですか ○
 いろくありますが、初心の間は餘り難かしいのはいけませんから
 成るべく容易い所にしませう、先づ貰ひ風呂の欠伸、これは極く覺
 ぬ易いのです、風呂屋の風呂なら遠慮なく手を拍つが、貰ひ風呂はさ
 う云ふ譯には行きませんから少々熱いと思ふても我慢をして這入り
 ます 甲「成程 ○「熱いのを辛抱して居ると、それが八万九つの毛穴
 へジューと染込む、スルと心持がよくなつて來るに従うて、ハア

ツ、と斯う出ます 甲「それは餘り色氣がありませんなア ○「欠伸に
 色氣のあるのはありません 甲「それでもモウ少し氣の利いたのを、
 ○「アは將棊の欠伸はどうです 甲「私も將棊は好きです、それをど
 うぞ願ひます ○「それは詰手になつて敵手の思案が長いので待て居
 る方が退屈して出る欠伸ですから其心持で、ア、長い思案じゃ、待
 たすとも待つ身になるなと云ふ諭があるが成程能う云ふてある、氣
 兼ねなしに能うこれだけ待たしたもんじやなア、ハア、ハアーツ、
 ア、辛氣な、と斯う云ふので、一遍行つてとらん 甲「ヘイ、ア、長

欠伸指南

い思案じや、待たすとも待つ身になるなど云ふ諭があるが ○「モッ
 く、さう目を刺いて肩をいからして居ては欠伸は出ません 甲、ア
 、左様ですか、エ、氣兼ねなしに能う待たしたもんじや、ハアーツ
 ○「それでは駄欠伸になつて了ひます、貴郎は態々欠伸を仕やうと
 云ふ氣になりなざるからいかん、モウ一遍行り直してみなされ 甲
 氣兼ねなしに能う待たしたもんじや、ハアーツ辛氣な ○「どうも他
 人に聞かせやうと思ひなざるからいけません、勝手に口の中で啞い
 て居たらよいので、何藝でもさうですが別して此欠伸の方では、自

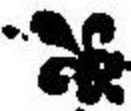
然と云ふ事が第一です 乙「ナニ、待たすとも待つ身になるなどは能
 う云ふた諭じや……、あはらしい將棊で待たされるのも辛いか知ら
 んが、厭がるものを無理にこんな所へ引張つて来て、クッ面白うも
 ない、ほんまに氣兼ねなしに能うこれだけ待たしたもんじや、ハア
 ハアーツ、ア、辛氣くさる ○「お連のお方は御器用ですなア……」。

◎筭



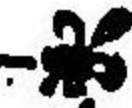
菊

これも舊幕時代のお話でございますが、或お屋敷の旦那が 圭「コリヤ、可内、大層家が煙るが引窓を開けんか、全体何を煮いて居るのだ」可「只今御飯を煮いて居ります、今日のお菜は旦那の至て御好きなもの差上げやうと心得ます」圭「ハ、ア、此方の好物とは何だ」可「筈でございます」圭「フ、ン筈か……、買求めたのか」可「イエ買求めたのではありません」圭「然らば何方からか到来致したのか、可「イエ到来致したのでもございませぬ」圭「買求めず到来もせず、如何致したのだ」可「隣屋敷の藪の筈が、境界を破つて此方へ生ね出



菊

でましたので、二本切取りました、それを差上げやうと心得て居ります」圭「ナニツ、隣屋敷の藪の筈が此方の屋敷へ生ね出したから、それを切取つて予に喰はせやうと申すのか」可「御意でございます、圭「不埒者奴がツ、渴しても盗泉の水を飲まず、暑くとも悪木の蔭に佇まず、武士は喰はねど高揚子と云ふ義者の戒を存じないか、左様な不心得の奴は手討に致してやるから其處へ直れツ」可「旦那、どうか御勘辨を願ひます、命ばかりは何卒お助けを……」圭「イヤ、さう驚く事はない、斯く申すは表面だ、實は錢入らずに食するのは



符

此方も望む所だ、可「ア、左様でございませうか、吃驚致しました、
 兎に角其筭を此處へ待て参れ、可「へい、御覽の通り旦那様
 な太い奴でございませう、圭「コリヤ洒落を申すな、待て々々、これを
 無断で食つて後日に知れた時は辯解に困るから一應隣屋敷へ答へて
 参れ、可「何と申して参りませう、圭「斯様申せ、其許の藪の筭が私
 方へ泥鰌を出しました、甚以て無禮な奴と主人が立腹の餘り手討に
 致しますから此段念の爲お答へ申す、と斯う申して参れ、可「畏りま
 した……、お願ひ申す、々々々々、〇「誰か居らんか、玄關に案内

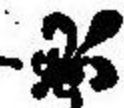


符

があるぞ……、誰も居らんのか……、イヤ誰かと思へば隣屋敷の可
 内、何用あつて参つた、可「エ、貴郎の方の藪の筭が私の屋敷へ泥
 鰌を出しました、無禮千萬な奴と主人が大變立腹致しまして只今手
 討に致しますから、此段念の爲お答へ申します、〇「ハ、アそれはど
 うも不埒千萬な奴で御立腹は御尤の次第、お屋敷の作法で以て手討
 に致されるのは致し方がござらん、併し此方の屋敷で生れた奴なれ
 ば誠に不便に存するから、お手討の上は死骸を此方へお送り下さる
 様此段お願ひ申す、可「へ、エ……、其死骸が入用でございませうから

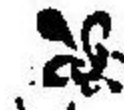
手討に致しますので…… ○「イヤお前の知る所でない、歸つて御主人にさう云へば宜いのだ 可「左様なら歸つてさう申します……、旦那行つて参りました 圭「御苦勞々々々、シテ何と申して居つた 可「お屋敷の作法とあらばお手討は致し方がない、無禮千萬な奴だから御尤の次第であると申して居られました 圭「さうだらう…… 可「併し此方の屋敷で生れた奴なれば不便に存するから、お手討の上は死骸を此方へお送り下されと斯う申されますので 圭「馬鹿を申せ、其死骸が入用だから手討に致すのだ 可「私もさう申しました 圭「コリ

ヤ、向ふでそんな事を云ふ奴があるか……、イヤ構はん、早く皮を剥いて其皮を箆か何かに入れて参れ 可「へイ畏りました…… 圭「ア、それでよい、モウ一度それを持って行つて斯う申せ、お案じ下されるな死骸は此方で今日正午の刻に町寧に葬つて遣ります、遺骨は今夕か明朝には必ず高野(圃)へ納めて遣りますから御安心下される様、是は彼の着類でござるから形見に差送ります、どうかお受取り下されと斯う云ふて玄關へプナ明けて来い 可「承知致しました、これは面白うございますなア……、お頼み申す ○「これはく度々御苦勞、



何うだつた可「仰せの趣主人に申しましたる所、死骸は此方で今日正午の刻に町寧に葬つてやります、又遺骨は今夕か明朝に高野へ納めてやりますからどうか御安心下さる様、これは彼の着類でございませから形見として差送ります、お受取り下されッ O「ア、コレくさう撒き散らしてはいかん……、然らば彼は最早お手討に相成つたか、ヤレ可哀や、皮嫌や」。

◎ぬの字鼠

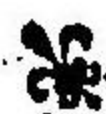


種々宗旨がございます中に、眞宗は昔から肉食妻帯を許されて居りましたが、他宗のお寺に秘密に女の置いてある事などが露顯れました時は、三日の間後手に縛つて路傍に晒しましたもので、それを思ひますと當今のお寺方は誠に結構でございます、併し現今でも幾等か昔の習慣が残つてあると見ゆまして、公然女房とはしてございません様で、雇女とかお住職の親戚とか云ふ風にして御婦人がお在でなさるのを見受ける事がございます、中には「只今良人は檀家の方へ行かれました」など、厚顔しいのも無いではございません、又墓



へ参りますと石碑の上に乳呑兒の裸襦が干してあると云ふ様な怪しからんのもあるさうでございませうが、私は聞いて居るだけでまだ見た事はございませぬ、閑話休題此の話はまだ其晒し者の刑がございまして時分のお話で、現今申上げますと少し感じが薄い様に心得ますが、どうか其思召で……。

焦「コリヤ小僧、智圓よ、一寸此處へ來やしやれ 智「へいお住持さん何でございます 焦「誰も其處邊に居やせんか 智「へい何誰も居てやございませぬ 焦「ウ、ン、コレ、モツと近う寄れ 智「へい 焦「貴



様は門前の花屋へ行つて、私はお住持さんの子じやなと云ふたさうなが、何故其様な事を云ふのじや 智「イエ私はそんな事少とも申しは致しません 焦「嘘を云ひくされ、花屋の主人が儲に聞いたと云ふて知らしてくれ、坊主に子が有つてどうなるものじや私は傘一本で此寺を出にやならん……、何程云ふて聞かしても汝は何じやらうとさう云ふ事を云ひくさる……、サア此方へ來い 智「どうぞお住持さん御堪忍を願ひます……、モウ今度から滅多に申しは致しませぬ 焦「イ、ヤ汝は口で云ふた位では性根に入らん奴じや、此方へ來

い「智」どうぞ御了簡なさつて…… 佳「イヤ今日は何と云ふても了簡しやせん」住持は到頭小僧を墓へ引張つて行きました、大きな銀杏の木へ縛りつけました 佳「サア斯うして夜通し此處に居くされ 智「お住持さんどうぞ御堪忍を願ひます、こんな所に夜通し居ましたら狸が出て参じます…… 佳「狸に噛まれたら宜いのじや 智「そんな事を云はんとどうぞ御堪忍なさつて……、お住持さん……、モシ……、頑鐵さん謝罪つていなア……、久助どん、其處で見て居すと謝罪つてくれたらどうじや」久助も可哀相なとは思ひましたが無か悪戯を

したのでお住持が懲しめの爲になさつたのじやらうから、暫く此儘にして置く方が此子の爲によからうと、ソツと見て居ります、小僧は身体を悶躁さます度に繩は漸々緊つてくる、さう斯うする間に日が暮れかゝつて入相の鐘が鳴る、夕風が銀杏の木に當つて葉がバラバラと落ちてくる、なんば馴れて居りましても墓原の事でもあり、そこは子供でございますから追々恐気がさして参りました 智「今まで悪戯をして叱られた事もあるけれど、こんな酷い目にあはされた事はない……、ア、さう〜何日やら頑鐵さんと佛餉を集めに行つ

た時お住持に云ふなと云ふて芝居を見せて貰ふた事があるが、其時の芝居に綺麗な女が恰度斯う云ふ様に縛られて居たが、あれは何とか云ふ芝居じやつた……、さうく雪姫と云ふお姫さんが松永大膳鼠を書いたら、其鼠が抜けて出て縛めの繩を喰切つて助けた、があれは芝居、私のは本真じや、第一鼠は能う書かず、ア、難儀な事じやなア……、オ、さうじや、彼のちりぬるの「ぬ」の字は鼠に似て居るから彼れを書いてみやう……、フウン……、巧い事書けた、コリヤ

鼠よ、どうぞ抜けて出て此繩を喰切つてくれ、一生の頼みじやどうぞ助けてくれ……」涙を流して心から頼みますと、一心が通じたとみねて其ぬの字鼠が抜けて出まして、縛めの繩をバラ／＼と喰切りました。鼠ヤア繩が解けたッ、斯うして鼠が喰切つてくれたら何遍縛られても構はん、けれども今這入つたらお住持さんに又叱られるから日が暮るまで門前へ行つて遊んで来う……」それを見て居りました久助は吃驚いたしまして、お住持の居間へ飛んで参りました。お住持様、ぬらい事が起りました。其何が起つた、何うしたの

じゃ、久「どんな事をしたのか知りませんが、貴郎が怒つて智圓さん
 を銀杏の木へ縛ひ付けなされたじやらう、焦「ウン、彼奴は悪戯をした
 ので口で叱つても性根に入らんから、彼の様子に縛つたのじや、モウ
 少と捨て、置く方がよい、直に救してやると懲りくさらんからなア
 久「今私が見て居ましたら、久助どん謝罪つてくれいと頼みました
 けれども私は黙つて居ました、焦「それで宜いのじや、捨て置け々々
 々々、久「所が一人で何か分らん事を云ふてました、何日の事か知ら
 んが何やら見た時に、何とか云ふ人が何とか大臣と云ふ人に櫻の木

に縛ひつけられた事があつたテ、焦「ハ、ーン、何處でじや、久「何處
 かは知りませんが、焦「フ、ーン、久「スルと其縛られた人が
 足で鼠を書いたら其鼠が抜けて出て繩を喰切つたさうじや、焦「ハ、
 ーン、久「それで私は鼠を能う書かんが、ちりぬるの「ぬ」の字が鼠に
 似て居るからそれを書いてみやうと云ふて其字を書いた所が、不思
 儀な事には其「ぬ」の字の鼠が抜けて出まして、焦「エ、ツ、久「貴郎が
 縛ひ付けなされた繩を喰切りました、焦「ツ、それから……、久「けれ
 ども今這入つたら又お住持さんに叱られるから、日が暮るまで門前

で遊んで来ると云ふて走つて出ました 焦何かい久助、その……小僧が書いたぬの字の鼠が抜けて出て彼の繩を喰切つたか 今ハイ、焦フ、ーン、だいく(焚妻)の子は争はれぬものじや。

◎近江八景

當今の學校は何から何まで注意が行届いて居りまして、教へ方なども子供が倦まぬ様、自分から進んで勉強致します様にうまく御教授

なされます、又授業の間々に運動時間がありまして思ふ儘に遊ばせますから學校へ行くのをいやがる子供は一人もございません、従前の寺子屋と云ふものは、行きましたら歸るまで座り切りで、眞黒な艸紙に字ばかり習はされまして随分退屈なものでございました、讀書算術は僅の時間で、大方は習字ばかりでしたから、従前の子供は皆字が巧かつたかと申しますと却々さうではございません、當時のお子達の方が遙か勝れてございます、扱其頃何處の寺子屋でも商賣往來と云ふのを教へましたが、其商賣往來を逆にした往來商賣と云

ふのがございます、夜鳴餛飩に辻占賣、干見世出、斯う云ふのを調べますと中々澤山ございます、其中に辻八卦と申して當地では千日前、天満天神様の社内、或は彼方此方の縁日などに本を提げて、夜分はランプに柄をつけて首筋にさして立て居るのもあり、又細い木を柱にして上に板を置いて焼穴だらけの色の褪せた毛氈を掛けて、店を出して居るのもございます、服装は大抵檳榔子の紋付を着て算竹笠木天眼鏡、それから細い字やら顔の書いた本を並べて、初めから一つ見ませうかと云ふわけにいかんものですから、聲なしに人を

集めると云ふ計略で、天眼鏡で太陽の火を取て居ります、甲先生どうも妙ですなア、太陽さんの火が取れますか、先イヤ別にこれは妙と云ふ事はない、甲へ、エ……先此天眼鏡は太陽の火ばかりじゃない、月の水も取れる、甲「それでは金も取れますか、先コリヤ馬鹿を申せ、そんなものが取れるか、サアどうじやお前方向か見てあげやうか、私が宅へ参れば二十錢以下で見る様な易者ではないが、今日は師匠の十三回忌の命日じやから其追善供養の爲にホンの心持で見てあげる、サアどうぢやな、運氣、縁談、人相、家相、方位方角

どんな事でも分らん事はない、とうじやな、私はどんな事でも後へ
 は寄らんと云ふのじや 甲「先生、それより後へは寄れませんな、後
 は解ですから 先「いらん事を申すな、ウ、ン、とうじや初めの二三
 人は無代で見えてあげる、無代とはタトじやぞ、タト程安い物はない
 先「私が當物をしてやらう……、お前は天満藥鑪屋町、商賣は藥鑪
 屋であらう 乙「先生、何を以て藥鑪屋と云ふ事が分ります 先「お前
 の頭が茶瓶で、しるめをひいて居るから 乙「阿呆らしい人を馬鹿に
 して居るなア 先「そちらの人、お前は堂嶋じやな……、米渡世たら

う 丙「これは感心、とう云ふ所で分ります 先「お前の顔はスツヒ顔
 で蕎麥粕だらけじや……、そちらの人、お前はとうも本當に強い生
 付じや、よい人相じや 丁「眞實ですか 先「ダガ併し爰に一つの障り
 がある、總て世の中の事は好い事はかりあるものじやない、それに
 はそれだけの害、憂と云ふものがある、人間に限らず昔から譬に云
 ふ通り、月に叢雲花に風、鯨に鯨、凡人でない釋迦にさへ提婆、孔
 子に司馬桓魋、太子に守屋、空海に守敏など、申して必それだけの
 敵、障りがある 丁「私の障りは何です 先「お前はよい人相じやけれ

とも目上の者に係つて大變苦勞をせんければならぬ、即ち親、兄、姉、伯叔父母、などの爲に苦勞をせんければならぬと云ふ相が現はれて居る、これはどうも致し方のない事じや、丁先生、私は廣い世間に親も兄弟も何にもない眞の獨身者です、先「ない」と云ふ筈はないが……丁「そんな無理を云ふても、ないものは仕方ありません、先「なければないでよい、もつと顔を出してみなさい……成程これで見るとないわい、ハ、ハ、ハ、そちらの人、お前の宅の乾の隅に大木があるじやらう、それはよくない、早く切て了ふ方がよい、且乾

の隅……、乾の隅には艸一本もありません、先「さうか、なくて幸ひ、有たら命に關はる……、ア、お前は岡山縣下中野郡小河町の住人で苗字は井上と云ふだらう、己「これは先生、國郡町名から苗字まで分るとは感心ですなア、先「お前の持て居る笠に書いてある、己「成程さうですが、先「サアどうじや、運氣、縁談、人相家相、方位方角失物、待人、夢判斷、何でも見てあげる、庚「先生、一つお頼み申します、先「何を見るのじや、庚「筋を見てもらひたいので、先「さうか左の手を出しなさい、庚「イエ、手の筋と違ひます、先「手の筋と違ふ……

…、足の筋でも見るのか 庚「イ、エ違ひます 先「何處の筋じや 庚「首筋です 先「妙なものを見てくれと云ふなア 庚「どんな事でも後へは寄らん、何でも見てやると云ひなすつたでせう 先「さうじや何下も見てあげる、首筋を出しなさい、ハ、一成程、お前は三本足と云ふて好い首筋じや、お前は佛縁に深い、佛に可愛がられる性じや、庚「けれども私はまだ佛と云ふものに手も合した事はありませぬ、先「拜む拜まんは兎も角、佛に可愛がられる性じや、首筋に千手觀音が歩いてござる 庚「觀音さんが… 先「襟に止つてござる、大さ

な奴じや 庚「ほんに大きな奴が…、一寸御免、アツツ 先「コリヤツ、無茶な事をするな、算木の上で風を殺す奴があるかツ、亂暴な奴じや 辛「先生、はつけいを見てもらひませう 先「八卦とばかりでは分らん、運氣、縁談、人相家相、種々あるが何を見るのじや 辛「エ、…、近江八景を見てもらひたいのです 先「近江八景…、辛「貴郎はどんな事でも後へ寄らんと云ひなすつたせ…、若しこれが見られん様な事なら此店をツ 先「コリヤ、店に手をかけてはいかん 危険な奴じやなア…、マアよい、他の易者は知らんが私は決して

後へ寄らん 幸そんなら早う見て下さい 先ヨシ見てやる、フ、
 ン、これは縁談じやな 幸左様々々、縁談です、よう當りました、
 それで此縁は有る縁ですか無い縁ですか、有る縁なら假令どんな苦
 勞をしても厭ひませんが、無い縁なら今の間に断念めて了う方がよ
 からうと思ふのですが、どちらでせうなア 先ヨシく見てあげる
 近江八景と云ふと……、先づ最初お前の思ふ女の顔は、比良の暮雪
 ほど白粉を塗り、丹花の唇美容の毗、それを一目三井寺より心は矢
 走、歸帆ぶん(氣半分)に乗出し、お前の方からささ(唐崎)に夜の雨

と濡れかゝる、堅い約束石山寺と言ひ交した女であるが、今では先
 方の心にあさの月が来て文の便りも堅田より(片便り)、なれどもお
 前は片時粟津(逢はず)に居る事は能うすまいが、これはドウ落雁な
 女じやから瀬田い(世帯)は持てぬ、今の間に思ひ切つて、よしに晴
 嵐がよいぞ 幸よう分りました、大きに有難う、左様なら…… 先
 コリヤ待てツ、人にこれだけの事をば喋らしておいて唯大らに有難
 う左様ならさはどうじや、見料を置かんか 幸見料とは何です 先
 今見てやつた代物じや 幸代物とは…… 先丸ツ切り分らん奴じや

なア、コリヤ錢を置いて行かんかと申すのじや 幸「近江八景に、せ
と(膳所)は入り(不用)ません」。

◎正月丁稚

「元日や神代のまゝの人心」と故人が申されました通り、元朝の心持
は又格別で、神棚へメツとお燈明を點けて祝膳に向ふて座りました
時の氣持は何となう良いものでござります、

これは御大家様のお話で 且一同目出たいなア、番頭どの目出たい
なア 幸「これは旦那様、舊年はいろ／＼と御厚恩を蒙りましてお有
難うござります 且「ハイ、どうぞ相變らず勤めて下され、太助
目出たいなア 太「お目出たうござります 且「空兵衛、目出たいなア
幸「お目出たうござります 且「久七目出たいなア 久「同じでござり
ます 且「同じとは 久「目出たい事で、何遍も云ふより同じの方が柄
が變つてよからうと存じます 且「別に柄を變へんでもよい、徳兵衛
目出たいなア 且「チヨホ、且「何ぢやそれは 且「同じと云ふ字を



略りやくしますと、ちやうくと書かきます 且や説明せうめいが入いるな……、丁種ていしゆ、目出めでたいなア 丁てい睡すいたいく 且や何を云いふのぢや、コレ清せい、目出めでたいなア 清せい煙えんたうござります 且や煙えんたいと云いふが何故なんで釜かまの下したが斯かう燃くすぶるのぢや 清せいパイ丸木まるぎが燃もれませんので 且や割木わりぎばかりで丸木まるぎは無ない筈はずぢや やが 清せいデモこれが燻くすぶります 且やコレ氣きをつけぬかそれは牛蒡ごぼうぢや 牛蒡ごぼうが燃もるものか 清せい京都きやうとへ参まゐりますと松明たいまつ牛蒡ごぼうと云いふのがござります 且や餘計よけいな事ことを云いふな 丁ていア、且や那たはんとお清せいどんと喧嘩けんかを仕して居ゐる 且や誰たれが下女げぢよを相手あいてに喧嘩けんかなどするものか 丁てい喧嘩けんか兩成敗りやうせいぱい牛蒡ごぼう



蒡ごぼうで済いんだ 且やコレ朝あさからそんな馬鹿ばかな事ことを云いふものぢやない 汝おまは口くちが悪いから氣きをつけねばならぬ、殊ととに今日けふは年としの始はじ、月つきの始はじ日の始はじ、三さんつの朝あさと云いふて萬事ばんじ驗けんを祝いわふ日ひぢやから、ものを云いふにも氣きをつけて叮嚀ていれいに云いはにやいかぬ 丁ていものを叮嚀ていれいに云いふと申ましますと 且や總すべてのもの、頭かぶへ御おんと云いふ字じを付つけて、先私まづわしの事ことでも御旦おんだん那樣なまと云いふ様やうにしたらよいのぢや 丁ていナンノと偉はらさうに 且や何を云いひくさる 丁ていそんなら御ぼんち様さま、御奥おんおく様さま 且やそうぢや 丁てい御々番おんごばん頭とう様さま 且やそれは二重にぢゆうになる、御も御も字じは同おなじ事ことぢや、丁ていナール程ほど

正月丁稚

御も御も同じ字ですか、スルと執から一つ付けたらよろしいのです
 なア 且さうく 丁「空兵衛どんの頭へごを付けたら、ご空兵衛と
 ん 且そんな怪体な云ひ様があるかい 丁「太助さんにおを付けたら
 お太助さん 且妙な云ひ様をすると乞食みた様ぢや 丁「おん久七ど
 ん、おん徳兵衛どん、私がおん定吉様 且丁稚には御もおも入りや
 せん 丁「丁稚だけは軽蔑しられますなア、これでも未来の軍人です
 且生意氣な事を云ふな 丁「ア、どがひが痒い 且どがひとは
 何ぢや 丁「當前に云ふたら頭ですけれども、丁稚に御もおも入らん

正月丁稚

と仰りましたから、とがひが痒い 且怪体な事を云ふな……コレ
 裏口に何やらぬらい音がした見て来い 丁「へエ、御下駄を御履さま
 して御暗いから御カンテラに御灯をつけて裏の御戸を明けて見ます
 と、御旦那様裏から、おんぼうが倒れ込みました 且「コレ何と云
 ふ験の悪い事を云のぢや 丁「棒が倒れ込みましたので、御をつけま
 すと御棒になります 且木で仕た物に御は入らぬワイ 丁「へイ……
 且裏へ出て若水を汲んで置け 丁「矢張り、けへ汲んで置りますか
 且けへとは 丁「桶ですが、木で仕た物におは入らんと云ふ事です

から 且「分らん事を云ふな、若水を汲む時は歌を讀むのぢや」あ
 玉の年たちかへるあしたより、若やく水をくみそめにけり」この歌
 を讀んでから汲むのぢやを 丁「へえ汲んで来ました 且歌はどうし
 た 丁「何とか申しましたなア 且「あら玉の 丁「ア、少し間違ひまし
 た、人だまの…… 且「モウ黙まつて居い、碌でもないことばかり云
 ひくさつて……、サア〜皆祝ふて下され」と聲がかゝりますと一
 同ズラリと並びまして 且「へえ旦那様お祝ひ 且「サア祝ふて下され
 且「旦那、此大福で一句致しました 且「それは流石番頭とん、何と

出来ました 且「大福や茶碗の中に匂ふ梅、とは如何でござります、
 且「成程よう出来ました、故人の匂に、大福に先かすみたつあした
 哉、大福は去年の青葉の匂かな、など良いのがあります 丁「私も、
 大福や茶碗の中で梅干と昆布が喧嘩して 且「お前は黙て祝ふたらよ
 いのぢや 丁「正月は餅を食べるのが楽しみですのに、それにこんな茶
 ばかりで察する所茶を澤山飲まして、餅を餘計喰はさぬ計略ですな
 且「そんな計略があるかい 丁「番頭さんに一寸お尋ね申します、今
 日の箸は常の箸とは違ひますなア 且「これは雑煮箸ぢや 丁「本町橋